



扶桑皇統記圖會  
後編  
六

八遠13  
2472  
L 3止



八巻  
2472  
13止

杖桑皇統記圖會後編卷之六目錄

朱雀院朝覲御幸

時平光等謀黜菅公條

三善清行贈菅公諫書

菅公得寃被為謫西府條

三善清行天象と見て菅公小書を奉る圖

仁和寺の法皇主上と諫めらんと宮門小立せり圖

菅公遺二十道明寺木像

播州曾根手枕松の支

菅公於配所詠詩歌

大宰府飛梅追松の條

杖桑皇統記圖會後編卷之六

菅公天拜山祈願并薨去

海會春彦忠實死去條

寛平法皇執葉雙岡

法性坊夢謁菅公亡灵條

菅公筑紫天拜山中祈願一の圖

浴中天裏内裡雷火

奸徒雷死法性坊行力條

時平患奇病薨去

光定國菅根喪死浴中洪水條

太宰府天滿天神宮居の圖

菅公贈官賜神号

延喜帝御讓位四海太平條

扶桑皇統記圖會後編卷之六

浪華好華堂野亭参考

朱雀院朝觀御幸

時平光等謀黜菅公條

左大臣時平の不徳引替て右大臣道真公朝家と重んじ忠勤公勵むる

小より上皇多殊更小菅公を御具負小思召常小朱雀院召れて政事筆を

行幸し時菅公供奉し手向山東大寺を通りし時の御奇小

此のいさぬさもとりむを手向山とてこれ錦神乃また

と録しり歌の意ハ様とす小道くの神小手向の教帛とて五色の帛とて裁て用

意す分れあれ也此度ハ大切ある太上天皇の供奉あれ也道真が私の教帛ハ用意し

此の山の葉を道祖神の御隨意小道直が手向なる教帛と覽りて納めさせ



多しなり。是時君の守護を急りおな忠勤の意と一首の中、筆のひし脚  
 歌もれど上皇も深く感し思召ひし道真公と愛しひ至上の御勅有る承相の位  
 小進めりひあり。斯て昌泰三年正月三日至上朱雀院へ朝觀の御幸ありし左  
 大臣時平右大臣道真公其餘の臣下も供奉せしる。上皇御怡斜あらず。至上と  
 御土器とりらるるの御酒宴ありて睦く御物器なりし多し。上皇宣ひし  
 中。當時左大臣時平と右大臣道真と相違で朝政を執行せしむ。好ふはれども  
 遂小きしらの逆不更出来ぬ思れし時平ハ故基経の子なり。年若く才短き上  
 不良行ひ有る其才あり道真を年高し當時の俊才とて天晴棟梁の臣と謂ふ  
 されど時平が執政の職を止道真小関白の職を授けしむ。万機の政を執行せしむ  
 天下永く太平ありと仰る。おと主上突中と思召。菅公人を御前へ召出し。以後  
 を卿一人して朝政を執行の御海の安寧とせしむ。いと両君ひびく。勅詔なりし。関白の

五

職小任を授けし。宣ひしを菅公大に驚れし。御身小冷汗を流されし。御心中  
 我猶代の権臣時平と起て関白職とありし。元龍の悔有下とて。君前小低頭し  
 りの君命緘系ありし。臣儒官の卑れ家より出で右大臣の高位を汚し。心  
 本あれど。二度表を奉りて官を解せし。其を願ひし。許しむ。菅公。天道へ  
 畏憚り小況。関白職を賜ふ。勅詔存りし。由らぬ。御更おて。斯て。左府と先  
 歴の貴族達君と恨み。朝庭の乱の端とも成り。此義ハ幾重の勅詔の  
 一むる。奉と固く御辞退なりし。ひき。至上。本意なく。思召。御  
 承引。た色目あれ。関白任官の義ハ止りし。道真公。兩君。奏し。ひき。今  
 臣一人を召し。更を左府以下。入。異。疑れ。を。其疑念を解せし。ひき。め  
 詩の御題を給る。願ひのひき。至上。思召。春生。柳眼中。ひき。り  
 題をど給り。菅公。右の御題を頂戴ありて。君前。退。公卿の結所。ひき。り

今日道真を召けり詩の御題を給らん御更なり列位此御題して詩と  
作り天覽小具らるるなりと。右の題を披露ありしが諸公其御更にてやと  
皆詩を賦して睿覽小備られり。此日公卿の面々禄と下されり。菅公は別  
小創祿の外西皇并小后宮より御衣を被けり。時平是を以て深菅  
公を妬といふ。賜然燃されり。同年八月菅公祖父清公卿父是善卿の文  
章を集御自作の文章も加へ三代の家集都て二十八卷。清公集六卷是善集  
是を編て朝廷へ献じり。帝睿覽が以て御感の余り小御製衣の  
詩をぞ賜りり。其御詩小曰

門風自古是儒林 今日文華皆悉金 唯詠一聯知氣味  
况連三代飽清吟 琢磨寒玉聲々麗 裁制衣餘霞句々侵  
更有管家勝白様 從茲抛却画塵深

帝如是管公を重んじ御賞美在と示付て左大臣方の人々愈妬と憎まれ  
る。昌泰二年十月廿日上皇小仁和寺の益信僧都と戒師とて御製落  
させり。法の御諱を空理と号しり。即ち仁和寺の御室を建せり。入御  
ありて専ら真言の法を行ひす。其のひたり。是より世人仁和寺とて御室と  
を稱しり。抑仁和寺とて一字多上皇いしが御在位の時御父光孝天皇の御  
菩提の為大内山の麓小寺と御建立ありて光孝帝の御宇の年号を以て  
仁和寺と寺号しり。益信僧都と任侶と。真言宗を立り。去程小  
帝八御年の長丁の小隨ひ万機の政正し。臣下と恤み万民を撫育し。更  
母の子と安んずるが如かれ。四海穩うわいて逆乱の浪起る更なり。一年冬の  
頃寒風殊更小厲。冬を女官別小綿厚た御衣を献りり。小帝曾て著  
む。世の中の貧乏民は寒夜小衣薄く凌死るぬを。朕今帝位と

踐ふみとしもい独ひとり衣いを襲かぶて身みを温あたためずあああすあととてと脚あし簾の外の外へ出でる  
あひあ一首いっしゆの脚あし製せい衣いを織おりり其その脚あし製せい衣い小こ曰いふ

おろしおるろ袖そでををああららせせ世よの中なか乃な寒さむ々々民たみは冬ふゆの夜よに

難あづ有ま仁に君きみかれを未ま付たくも延えん喜ぎの聖せい帝ていととせせららるる帝てい尚なほ脚あし幸しあ若わく

脚あし座ざをを定さだ圃ぼ管くわん根こんの侍しやく臣しん君きみ小こ勸すすめめららるる古ふるの賢けん王わう六りく巡くわん狩しゆと

号ごうし春秋しゆんしゆ小せう田てん獵りやくし民たみの艱けん苦くと察さつし行ぎやう旅りよの難なん易いを量りやうののとと名な君きみも万まん

民たみを撫ぶ育いくせんを思おも食をを宮みや中ちゆう乃なと脚あし座ざをを折おりり山さん野やへ脚あし持ぢ乃な脚あし

幸さい乃なの農のう民たみ們らが耕かう耘ぎんる辛しん苦くをを睿えい覧らん乃なとと言い巧くわう乃なと

奏そうししれれをを睿えい知ちの帝ていもも兩りやう人にんが不ふ正せい引ひくもんを謀まうる侍しやく言げんありと知ち食じきず

實じつももとと思おも召めい定さだ圃ぼ管くわん根こん希き世せい以下いげを召めい具ぐののひて神しん泉せん苑えんへ鷹とう鳥じやう狩しゆの脚あし幸さい

乃なの鷹とう鳥じやうを放はなす鷹とう鳥じやうとと合あて脚あし入い與よありと脚あし酒しゆ宴えんを催もよほししる所ところ小

鷺さぎ二に羽う飛と来きりて池いけ下したり魚いさなを求もと食を々々れを帝てい甚しんをを與よせせるを左さ右うの近きん臣しん

彼あ鷺さぎ鳥を捉とりと余あ余を小せうの臣しん下した勅しやく詔しよくを奉ほうり兩りやう三さん入に庭ていへありと洑しやく崎せきの山さん石いし深ふか小

隠かくれてとるを鷺さぎ鳥を捉とりと余あ余を小せうの臣しん下した声こゑををけや上かみ路みち上かみ

追お追お遠とほ去さ去さ己おの小せう羽うははららひと飛と去さんとるを人ひとの臣しん下した声こゑををけや上かみ路みち上かみ

勅しやく命めい乃なとと言い去さ去さ吏し勿なれと言いれと不ふ思し儀ぎやと立たんとせと鷺さぎ鳥を忽とちまにに汀ていへ游あそぶとり

手て近ちかくとるを小せうの官くわん人にん安あんとと捉とりと帝ていの玉ぎよく座ざ近ちかくとるを睿えい覧らん乃なとと供ともへへ

君きみ深ふかくと愛あいせせるを鷺さぎ鳥を小せう五ご位いの位いを賜たまひとるを是こゝよりと世よ人にん五ご位い鷺さぎ鳥をとと称なづ初はつと

乃なとと折おりと菅くわん公こう入い来きりとるを帝てい龍りゆう顔がん麗れいくと玉ぎよく座ざ近ちかくとるを只ただ今いま鷺さぎ鳥を乃

勅しやく命めい乃なとと言い汝なん汝なんとと己おのとと捉とりと趣そを語かたりとるを小せう菅くわん公こう色しきを正ただしとるを城じやう

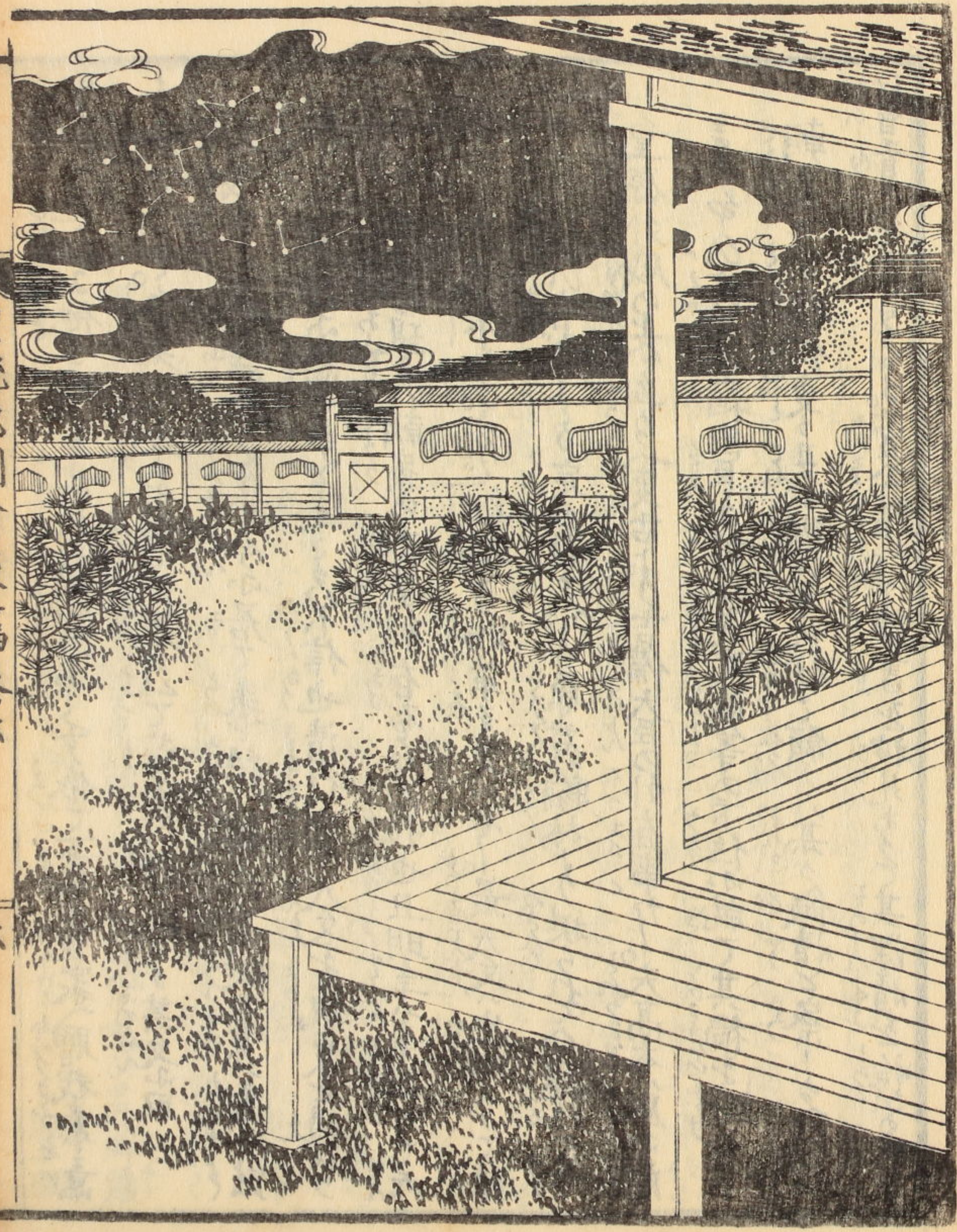
小せう一いつ天てんの君きみの勅しやく詔しよく乃なとと鳥と類るいもももも畏おそりとるを吏し是こゝの如ごとくと況いはんと万まん民たみ乃なとと君きみの龍りゆう鳥と乃

向むかふ所ところの者もの乃なとと畏おそりとるを農のう民たみ八はち耕かうを止とめと杖つゑとと止とめと自みづか然ぜん下したの障さやりとりとりと患うれ

皇統元巳國會後高宗二十一日

を生むる基ふては紛論昨年殺生を禁じ田捕を止むひ今今年鳥獸の  
 何の科のや一旦出しし倫言汗の如く再び及す鳥類より不信を示  
 小青りて赤面しし御酒宴をも止りて還御かゝり定國管根等  
 案小相違し又左大臣の館集會。兎も角も道真在ては更の妨かり荷  
 陽寮の輩小只咀殺せん勅宣かりと偽り財宝と多くす所有冥衆を  
 非禮と受むるは兎も只咀の術も更其驗かりたり  
 三善清行贈菅公諫書 菅公得免被謫西府條  
 昌泰三年秋七月彗星現るるに緒人仰て大い彗星出る時兵革

起ると謂ふ此頃左大臣殿と右大臣殿と御中睦まじりと風貌せり是れ更  
 よ世の強弱出来ぬ前表ふやと危を合たり。茲ふ文章の博士三善清行と云  
 入あり。先祖百濟王の後裔にて僧淨藏貴所の父なり。清行博學多識ある  
 上天文曆道も達せり名士たりたり。彗星を望んで門人小謂て曰今彗星現  
 りと公て世人兵亂の起るぬ疑ひ兆ありん疑ひ危むと人も非かり。彗星八其  
 年小因て吉凶定めば今年彗星兵革の兆小非ず。恐くは是朝廷の大臣禍  
 ひあり兆あり。夫れ就て熟考する。今右大臣道真公儒家より抽でられて三公  
 の高位小登用せられ六素り其身の賢徳小因とちあられども。左大臣時平公其身  
 の不徳を顧ず。平日小菅公と忌嫉む色あり。斯ては菅公終小佞臣の類舌乃  
 小め小災害御身小及ぶ。當時主上聖智小在せども。いづこ御若年ありし  
 菅公朝廷を退けられむ。朝家危るる。我菅公と深く交るむわがれども



三善清行  
天象  
見  
菅公書  
奉

三善清行



賢相の危を他ふんんと忠臣の所行あらず。依て重臣管家贈我素意  
 を表さんとて自身文章を綴り門人を以て管家贈れり其文曰  
 交浅うと結深たは安也今尔居て来と結は綻也安綻の責まかり能  
 知とくとも心ふ思ふ事と述ざる不信也清行明く天文を類更を得い  
 今年彗星の現るハ朝家の大臣小禍有るハ兆也且明年ハ辛酉也天  
 命と革もつ年なり。されば朝廷の物革る更はる。最天文ハ幽微ありて維  
 身小禍ハ有るも定め難るも尊君翰林より撰られて今擢位昇  
 皇孫外戚の上立ちの吏古より吉備大臣の外有事カ。夫高木ハ風小悪  
 まるの疾く丞相の官を辞し。光定國等の下位に就て其禍を避むる  
 朝家の幸福何更う是ふ過のむ伏し願く其微情と察し久恐惶  
 秘首首とて書つる。菅公清行が練書を披見ありて其深情を怡びぬ

如何思召々人官と辞せんともある乎其休小亦過のひく。是より前小左大  
 臣方の佞臣們の菅公と兎咀調伏しれども其験ふれぬ又光定國菅根ホ  
 佞古と逞うして帝へ諂奏しる。道真義己が女の婚する齊世親王と帝位小  
 即其身外戚の威を震ひ富貴を極んと上皇小より入専君の御行跡と悪様  
 小縁の吏隠かく道真が齊世親王を世小んと思ふ望ハ一朝一夕の吏ハ守  
 上皇いす。御在位の時春宮君を密祚を譲り小んと道真御内勅あり  
 節道真遮て是を止めり由。上皇の渠が邪弁小惑されぬ。御讓位の義と  
 止り小。是婚の齊世の君と帝位小即ちある。せんの下心から吏頭を。此れ  
 其後群臣小御讓位の義を問せぬ。小春宮御受禪ある。吏理の當否小  
 小と群臣二日小啓奏しる。由。道真申妨る吏能す。俱小衆議小順ひ君御讓  
 位なり。と美せし。其内心を深く憤り内君を調伏し。なり。風小風

説もはえいゑんが跡形もあれ更と交り奏し加之申むと后皇平の時平の妹も在  
 せむ左府局長も多く賄賂を乞ふ如是くやせよと命ぜられむ局長も身不  
 得の付と悦び審小后皇小孫言々申す右大臣殿の御妻婚君も齊世親王を  
 天位小即すあせんる帝と兎咀崩御たをせんと巧も申す急死帝へ其由  
 を奏し之と信し言上するも后皇平御年若く素り弁へた女性の御妻成  
 む大に致れむ帝へ局の申せ趣を内奏あり右大臣と退けむと時平御勸  
 ありたり如此内外の逸奏度重りなれむも聖明の帝も始信下むるはれむ  
 後く少く御疑ひの睿慮と生じむ具御遊與御狩あふ侍も管公度練  
 むひの管公と疎むとせむも御慎深れ御本性あれむ猶色おも露るも  
 何の御沙汰もナク多れむ時平と首と一味合射の佞臣們の登と隔て足を掻心地  
 一々斯て昌泰三年も暮明も四年小改元ありて延喜元年と曆号し其年

の正月元日小日蝕し多るも左府時平及び光定圖々下大小悦び浪波道真と退  
 くぬれ時節至ませりと兼て巧と致る主上調伏の形代を納る管と東山乃將  
 軍塚の辺より掘出し所者より辨し出と偽り帝の睿覧小入逸奏し多るも  
 東山よりうる兎咀の形代を掘出しして彼所の里民より差出しぬと檢見ぬと恐  
 むも君を細伏しなる由の願書と筆い最難も姓名不記いとも必定道真の  
 所為もてい命前公て道真が野心を止む義を奏聞小及ひいへとも君いす信ト  
 むす己小當元日小日蝕しも天より凶変を示し所公て陰陽寮の者乃勘  
 文も元日の日蝕大臣君を侵を凶兆して天子の御身小深れ御慎と在す  
 るれし一奏達仕りぬ此上早く道真を退けぬて凶害と穢ひるも命と命  
 舌巧小奏し多るも帝は先頃より佞臣の逸奏も御疑念と生じりし上女御  
 よりも時平管公と退けぬるも内奏あり多る小より浸潤之譖遂小行しと層

受の想忽ち小成さしも明智の帝も元日の日蝕とひ調伏の形代を御覽ありて  
睿慮暗みて大に逆鱗存し。後上道真及び四人の男の官を損して遠嶋へ  
流罪せし。齊世をも落飾せし。倫命とぞ下し。時平奉り。妻成り  
と独笑して君前を退れ。光定國管根清貫希世ホの奸徒小勅詔の趣を  
やせし。小笑坪小入急小宣命と書記させて大納言清貫を勅使と。解官瀆罪  
の上と菅家や遣し。無道なり。時小菅公はる凶妻有とも知。子  
御参内あり。己小衣冠を著し。所小俄小大納言清貫宣命と捧て入来  
り。菅公訝り。俄の宣旨何事。やと御不審暗む。早速客殿  
詰入来の旨と問ひ。清貫菅公小對ひ。主上貴卿小御不審の義御座  
す。右大臣の官位を剥。太宰権師小任。筑紫へ左遷させ。兵小四人の子  
息達中解官と。遠嶋へ移す。勅詔なり。最格別の御仁心を以て。女性小

御咎。難有倫命の趣を拜聴せし。宣命と捧げ。續其文意を  
右大臣菅原道真義莫大の朝恩を忘却。我婚する齊世を帝位小即其  
身外舅の威と恣せん。為隠謀と企朕と調伏せんと謀る。其罪死刑。行ふ  
かれあれども。先帝の御愛臣と。以て死罪一等と免。右大臣の官位を削り  
太宰権師と。筑紫へ左遷せし。者たる。兵小長男。右大井高恒。土佐國次  
男式部大丞景行。佐渡國三男藏人景茂。讃岐國四男秀才敦茂。伊豫國谷  
解官。配流せし。と。菅公大に疑れ。是左大臣及び光定國等が  
總奏。依て。聰敏の明君も。倭音小惑。され。事。道真小罪名と。給ふ  
はる。是天かり。余。と。歎息。ひて。為。方。宣。上。日。趣。奉。り。領。掌  
ち。清。貫。名。極。上。疾。配。所。赴。准。備。せ。る。と。憎。け  
小言捨笑を合で。其後。菅公の御臺所。と。兵。子。息。達。姫。君

女房達家士嶋田忠臣田辰音渡會春彦あへん夢小夢人かく是如何なる  
勅詔とや一点も曇らた御身小くる無実の罪と負せし恨りまよと泣き悲む声館  
の内小充滿より忠臣辰音春彦亦堪らぬて菅公小向ひ君聊の御過申在まぬ  
小くる無実の罪名を称れぬ後者の所為ある更鏡小くけられも頭等より何  
由一應も再應申御陳謝なりまぬ疾く御忝内ありて御身小罪無よりを歎  
奏せしめをなれ其們隨從し君後人們妨げないて小斬て捨不敬の罪を身  
小引受其場小て自殺仕るべと言上ると菅公制し予素り後者の所為也  
と公疾知といふも倫言汗の如く出て再び及るを承れあらず道真が無失の罪小論  
む更奸徒の縁奏小依ともう也といふも是定業なり其故往年渤海使斐  
頰予と相して曰後年必ず位三小進なり然も久く高位小居おも福小其身小  
及ぶると果して其言の如く不肖の道真先帝の膺慮小協ひ追く小位階と進り

ゆひて遂小三小の高官を授り予君命の忝れを以て一旦擢位と汚せし相者の  
穢を想ひ一月まで三度まで表とまりて官と辞し然も王上小上皇も敢て許し  
あつても小依て未終小禍ひの身小及ん更を知といふも君忠を重んて今日と  
三公の高位小居り去年三善清行太文を考へ予が災害小遭人更を先知し練  
書成贈て官位を辞せよと勸しりも己小先年三度辞表と奉れぬ勅免あれ  
上小今更身の禍ひを免とんとて君忠を顧ず身の安逸を計ハ忠臣小あらず  
所存と定め清行が練をも捨しり此身の無実の罪小沈む更小素り定  
まる天余たれを誰ぞ怨む誰を悪むをたれ道真無実の罪小論むをたれ  
天數かゝんむ後者蘇秦張儀の舌と借て君小怨む怨む何と道真を配  
所の新嶋寺とあす更を得んや文王も姜里十七年囚れ孔子も三月陳蔡小圃  
まれり聖人さす時の不肖小免とむをたれ況や凡庸の道真小於かや你健が忠

義の志ハ喜多れも右中守すべくもれを参内と歎奏す所存なりと悟り  
 まり玉ひし脚言小嶋田田渡會も其の餘の難くも及ばず死すも皆  
 無念乃涙ふれてと居り去程小門羊正月廿五日上卿小大納言菅根織  
 小右中弁希世時手の下知を受檢非違使の下司看督長小異の張典五挺早  
 菅家小到りて發足をせりとて期りのいり更かれむ右大臣乃衣  
 冠を脱捨自ら狩衣烏帽子と著て脚臺脚子息方姫君達と別離の玉器と  
 和歌を詠み流る無実の罪小沈と思愛の妻子と生別りのを悲しむ一首の  
 和歌を詠み渡會春彦を脚使して仁和寺小在す法皇小献の脚歌小曰  
 春彦是を給りて泣く仁和寺の脚所へ赴たる菅公ハ嶋田忠臣小脚臺所姫  
 君達の脚心抱の義を死しし脚身ハ田原音を隨從と張典小乗のいれを

四人の脚子息も愁然とて各張典へ乗のいれを見し脚臺姫君を致て  
 よくと泣伏し女房達緒士奴隷婢女いり追脚別を悲と哀慟と実や別  
 離の中小生別と悲しむわらずと古人の言々今人の身の上小思ひ合れ心  
 宜駕車下も不覺小袂を沾り増てや菅公の脚心中と悲しむその身を  
 さり氣あれ脚顔色かて涙の色も見えせむね脚心中と推量り泣ぬ人々を無り  
 斯く駕与下們思ひく小五挺の張典を昇上て館の門外立出る菅根希世左  
 大臣の詔へ歸り五挺の輿も五方小別とて昇行りしれを菅公脚左遷の愛情と  
 述のいり二十八韻の脚詩の中小聞入腸と助想せりハ  
 自從勅使駈將去 又子一時五所離  
 口不能言眼中血 俯仰天神与地袂  
 呷悼いふ仁明文徳陽成光孝字多の五帝小事ハ忠勤怠なく朝政の爲小

嗚を吐ひ一忠臣も忽ち死す舌の爲小無辜して左遷の客と成り是是非非を  
實や古人も叢蘭茂んとすれは秋風是を破り日月明あんとすれは浮雲是を掩  
と賦し又人君治人と吏を願を倭臣是を乱すと言はん今延喜の御代思ひ  
合されたる菅公無実の罪を得りて左遷されし吏を洛中洛外の人民皆傳  
大不該た今の世菅丞相居るを朝廷の政乱と世は暗闇小等しる事いと  
貴賤老若とも強は感ひ左大臣止り右大臣流されし以て右流左止くと  
言りける今の世で心憂とせし吏を右流左止と云ふ此言の遺るなり穢小  
末代も賢王と稱せしれも延喜の帝も菅公を左遷し一八脚二代乃脚  
過して在り是は且其の菅公二月朔日小任別館を出し夢路を刺る  
脚心地小て駕も列も張典小淘と都の街通せしを老若男女路の両  
辺小充滿と脚餘波を惜み涕泣む声街小流り情をまぬ下吏們好小威

者を苦懲し追まひ己小五條坊門西洞院を通り小此所小紅梅殿とて菅家  
脚別館有るを菅公看督長を召し苦く少時別館へ立寄可まりた  
仰る小長情ある者小領掌一都を小刺限り小出進せよと命  
令とて宵の程苦くいと典を昇居て入り小菅公大  
脚喜悅あつち通せし思ひ小思ひ小却其室所姫君違ひ今一度の脚對面  
を願んとて昼より紅梅殿へ来りし脚通行を待し一吏なれを縛ひ出て公  
乃脚持衣小と植り左右の脚言ひ面小小声を放て泣く菅公強れを以て  
制し思ひまを你違小此所小再ひ對面せんとして今更心塞る心地し何  
是と脚物結あつて不覺時を接し思ひ小然不思議なり洛中の寺院の僧  
徒菅公今夜九時限小帝都を出りて傳聞雜言合さし九時の鐘を撞す如  
之を守脚名残惜ま小ハツセツの鐘を撞ざりしを敬言固の官人們由夜の更るを

あつと比肩心わく坐睡て在る。六角堂東寺など小晨朝の鐘を撞鳴り多小  
 歩發た眼を覺て天をえん。早東雲の頃あふ小ど大小發いり田口辰豆呼出  
 少時の内と仰多也。私小此館へ入進せり。小早夜も明方なり。疾く出させり  
 中言上まれば言多る。辰音緒て菅公へ右の由申上られた。公も鐘声脚心小徹  
 一。夜明も人目申上り。脚音残る。心強くと出る。脚音姫君達を今  
 更脚別の悲しき小声を惜と泣沈み。七五の幼れ姫君。父君の袂小掛り裾小纏  
 りて泣叫も目も當られぬ風情なり。公は是もも振拂ひのして出る。小早明方の  
 灰明れ。脚愛樹の紅梅今を盛と咲乱。公脚覽。是と都の春の名残と思召  
 東風ふくむ白ひとらせよ。梅乃と柳主なり。とて春ふくもこれと  
 と泳いもひささ。櫻を脚覽あふ小。花咲かれも終の盛を思ひ申りて  
 ちくちく花ゆきを忘とぬ。あふ吹ん。榮くはげとさせよ

時を感じて。花も涙と瀧た別を惜て。鳥も心致驚す。あふ見物皆脚心を悼ま  
 し。あふる。春の曙の艶あもる。續行の折。たれを哀れ小物悲し。寛の  
 平日。菅公を敬ひ親と睦む。人も今般の脚左辻を歎。朝廷を恨と妬れも  
 流る。左大臣家の咎を怕て。や脚見送。小春も人もかくとどぐと。紅梅殿と出  
 因。小北野天満宮。脚造管の後。六角堂東寺。あふ晨朝の鐘と撞。神殿  
 大い鳴動。さも。其後。六角堂東寺。も明六の鐘を撞。す。とや  
 斯て。菅公上鳥羽。と。到り。所。此所より。脚船。小乗る。あふ。船が。や。官  
 人。曳渡。都の官人。皆。帰。り。菅公。と。脚見送。の。脚親族。脚門人。達。も。皆。涙。の。袖  
 を。別。ち。て。帰。れ。る。其。中。小。脚。基。所。より。脚。見。送。の。使。者。を。返。し。も。さ。て  
 君が。す。む。や。の。木。末。を。ゆ。り。も。隠。る。ま。ど。あ。ふ。と。り。え  
 と。縁。ど。脚。基。所。贈。り。ひ。さ。さ。然。る。所。小。渡。會。春。彦。啼。く。走。来。り。た。れ。も。菅。公。脚

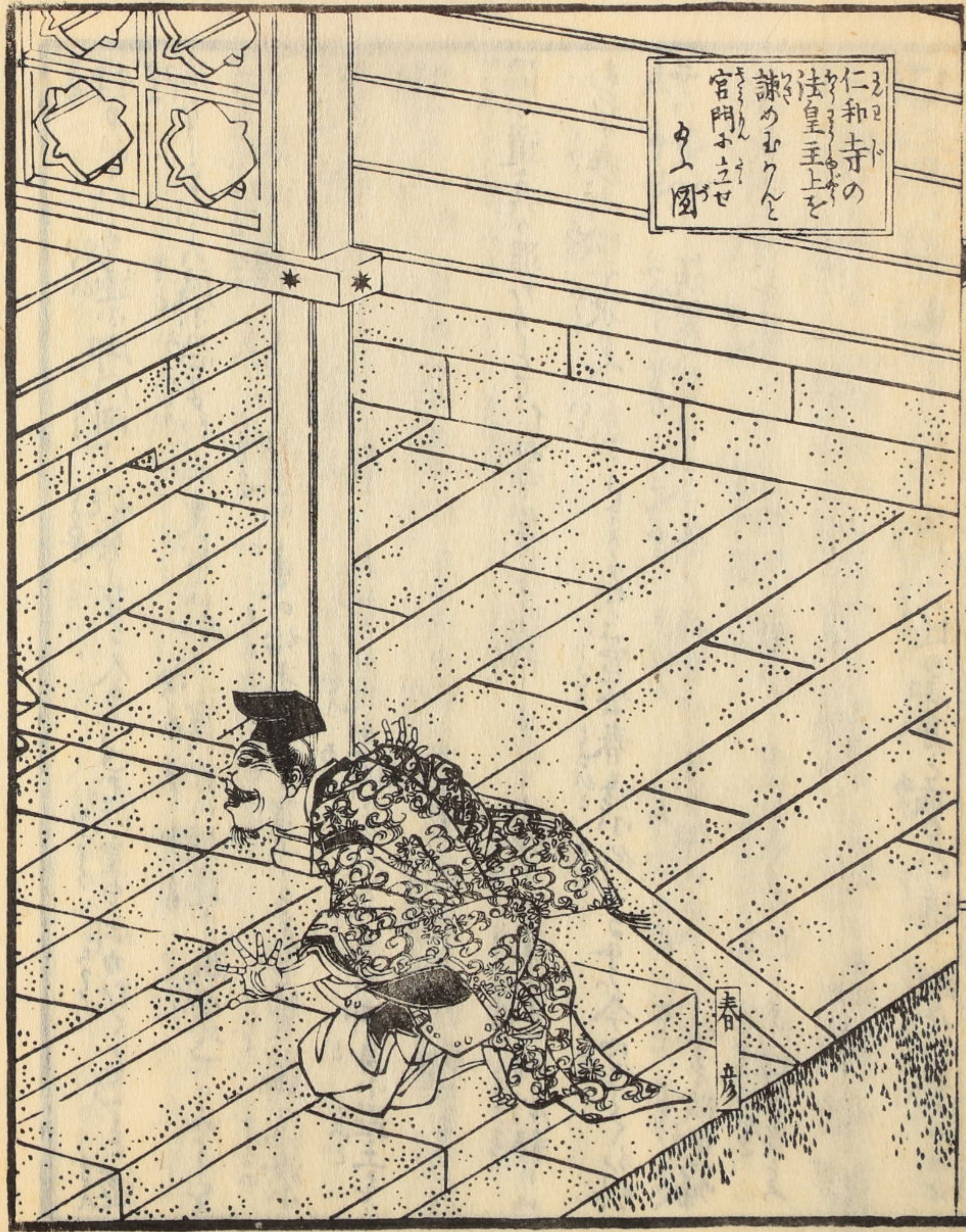
覽とて位く召れいふや春彦法皇の御所へ参り予が歌を献りてやと向ふ春  
 彦砂地を眺れさん御室御所へ参り御短冊を差上りて法皇の御外驚  
 りせの御上御幸看りて絶者の御惑まれの朝廷の忠臣の道真と無罪の  
 左遷しりて薄情なれ今の世道真あえむ万民の歎れ世の強と成ぬ帝  
 といせども我子かり春内と練り道真が流罪をや宿む辱し你我の隨ひ来よ  
 と宣の御典も乗まると御草履を履て大内(行幸)なりの上西門より入御あり  
 清涼殿へ近着の御門せよと宣も左大臣殿の針の相見へ敢て御門へ用  
 人も増て御執奏者もいふに法皇甚く憤らせり我何の咎ありと春  
 内を拒む門を閉りて待せりと宣の大庭の椽樹の下に停まると日  
 の暮る夜も厭いむと待せり仁和寺より御典を昇て大勢参りて還御  
 勸められも法皇更御用ひむと餘寒厲し終夜あまけり御小卯の削を

待ちのいれも遠小御門用す執奏しなる人もいふに法皇も御力なくとて還  
 御なりぬ八城お忍み御更小といひに官君の隨逐に筑紫へ下りゆると  
 言上御暇を願ひ是す地赤いと更の始末と委言上りて菅公御落涙小  
 狩衣の袖を浸りて法皇敷あぬ臣が左遷を憐れひ至尊の御身小泥土を  
 踏せり刺へ春寒の御膚と犯りて成中厭せむと終夜玉膝と困のまりハ  
 偏小道真が罪かりとて仁和寺の方を遥拜しひる船方の官人へ時刻移り  
 あら疾御船小乗めと急がしりぬ菅公春彦小仰る申今中かくあは  
 予小乗船一筑紫へ赴け今生小て再會せん更も預め定かし你を故御帰  
 リ心長雨の老を養ひいと捨船小乗んと身を春彦忙し御裾を曳と  
 是は何なる仰ふて抑君御出生の昔より今日小追一日御館と去り重  
 代の主君と思ひ事なりい小斯左遷の御身と成の遠く配所へ赴れ人を





仁徳天皇御宇  
法皇御代  
中興元年



仁和寺の  
法皇王上を  
謝するに  
官門を立て  
中興元年

仁徳天皇御宇  
法皇御代  
中興元年

中興

争り見捨もりぬる小官當年八十才望日もあぬ露命とるも故郷啼も存  
 心毛頭の心と老小老く脚脚手纏と思召筑紫の随従小官連かぶと生て中  
 く物思ひいんより此水底身を渡りぬると己小川飛入んとす小ぞ田辰音慌  
 て抱れとあ老人の斯程ぞ思結いぬ万望随従小官連させりと願ひもる小ぞ公由  
 御承引在りさくを免も角もとて御船小乗り春彦大少始び辰音が好意を謝  
 とる小船乗移りもふより官人船子小纜を解せ西を臨んで船を走らせも  
 菅公遺干道明寺木像 播州曾根手枕松文事  
 斯て御船追風小従ひ八幡山崎なり走過々小日和妻て雨をかくと降中漸  
 く小降増りと菅波雲も紡績よりぬる船子の御痛りく思ひ河内國佐田の里  
 へ御船を著雨の霏る候待もる小官所の長真木某菅公御船りよりさく御  
 船へ参り余りの大雨おいて程小某が茅屋へ入せり今宵八草の席小一夜を明させ

りと言上るん菅公怡おせり警固の官人小此義如何あえりと向せり亦昔もす  
 りとやふより辰音春彦官人未を召連り真木小御導もせて其家参りり真  
 木ハ大系尊敬と御王器と献り餉を勧まりさかどて管侍れり公其深情を謝  
 しめいとも當所は何も里ごと向り小家務もて河内國佐田と呼れと言上る然  
 ら此里より當國道明寺まで程遠れや不と向り家病もて各て道明寺へ八  
 五里むりもやゆゆれと言上る菅公曰道明寺の住僧覺寿尼とハ八平が伯御  
 前なり都小在り時ハ公勢繁く訪ひ進も暇もありぬ今左任の身とかり程  
 遠うぬ此里来り不致供侍かり目ゆいよ黄昏あれを伯母許訪ひぬ此更ゆ  
 てんやと警固の武士願ひのいれを今夜の内むりの御妻あを昔もくすく未  
 明小還せり命と御承りやより菅公怡ひの辰音と警固の武士を召連り  
 御身ハ賤の竹駕小乗長小御導もて道を逸させて道明寺参りり西年

頃ふと著のしる是下ふ前が眞壽尼公菅公左近の御身と成りしと云ふは  
 大糸孫丸新丸の身紅涙小法衣の袖を浸りしと云ふ今宵も守先臨む  
 のしるを思ふと許しはる申の菅公の御顔と人の心付て言葉より先脚涙と  
 先なる菅公伯母尼公御對面あり其御無事を祝ひし配流の身と成り  
 とも再の拜顔も期しごとく今宵の御職とのめ糸いと仰せぬ尼公雨と後なる  
 彼唐土の屈原と申ふ幾言の爲君疎まれ江潭ゆさるよひ見ぬ唐國の昔籍と  
 のと思ひまじりふ豈甘ひま今御身左近の事と成りしとて人の難面世の憂と  
 算とて悔と眼のしる涙を流して又曰く素より過ちなく事ある御身たれ夫  
 君の程なく御後悔在り故洛勅免の紀命下り并出度旧の位小還りふ分れ期も  
 侍ふれぬも尼公年々老て聖旨の命も頼れぬ願ふ御姿を繪小写ししを  
 とも木小刻かりともと此事小遺りし歸洛在す追の御達小朝々小見すのせて老

の心成慰め侍る御と望むのふと菅公有合木成りて御手はく御身の像と刻  
 りしるふいと粗造の内小早八声の雞の音ゆえを敬言固の武士孫丸己小曉小  
 及び雨も疾霧の御各残は尽すよといふも今御船(還せよと言上ぐるも)菅公も為  
 方なく荒木造のす尼公進了せの御別を告むひてと出のよとて  
 啼むことこそこれを急げ雞の音乃ゆえぬ里のあられもが那  
 と詠のし終ふ道明寺と出のし佐田の里を還了せのしる此御哥より今宵て  
 河洲土師村小雞を飼むと云ふ斯て佐田より又船小乗のし流小順ひて摂津渡  
 迎福嶋まで下りのしる小西風強く吹出るを斯て御船を下し難とて福嶋へ  
 船を着風の和風を相待ぐる其風待の内小菅公陸よりせのし其所此処と道遙下  
 りの融の大臣の都潮と運送をせり古郎を御覧し其辺の森法を通りぬ  
 ぐる小松の葉の露風小吹れて降洛御狩衣小くまをを菅公よりあむと

露と散へ小袖と括より都のて成以ひのり  
 と詠いより。後小此所小天満宮を造管一露の天神と稱しなる此御哥小依て号  
 所かり俗おかり又風待小御船を著一福嶋中御社を建り上申下去程小西日許  
 まく西風止れを纜を解て御船を出々小是より追風吹續たり津路を過急  
 ともわたり小御船明名の浦お著る。當所の馭の長菅公先年續岐の任小下りひ  
 節長許小者らせりひ御懇の御封を下され小す。馭長忝あり思ひ重々尊敬  
 一種く管侍しより今度由船を下させりひ長許入せりひ。馭長菅公の  
 御左遷の義を疾より傳す。大糸彦れ愁ひ歎たる小今更寄せりひをせりてとの  
 幸と深く悦び席を掃淨て御座を設請入り。尊顔を拜しと不覺の涙小  
 られ置小額を付少時頭を上り。稍有て面を起し不慮御左遷を御悔り上  
 流涕小膝を浸りたるを菅公馭長を制しむひ一聯の句詩を吟ひる其御詩小曰

驛長莫驚時變改 一粟一落是春秋

馭長是を拜聴と深く感慨涙を落す然其夜より大糸逆風吹出され  
 を順風小吹ありてと。長が許小逗留一より更三日あり漸く風追風り  
 かりたる也。船子より其言上り小す。菅公長小別を告て御船小と兼ま  
 ぐる馭長の逆風の十年廿年吹續りと祈し甲斐たかく今更別とむる悲  
 と船中の御慰小と種々の物を献り涙あがり御見送をかりたり。物の衣と  
 まるぬ船子とも早纜を解り漫りたる海上へ乗出帆を曳揚て追風と孕せ  
 御船を走せざる小を。馭長ハ御船影の見えぬ迄足を翹て見送り進らせ浮家  
 路へ歸りたり。去程小菅公所被御船の中より浦山の景色を御覽むる中一車  
 續岐の任小下りひ一時ハ風景と翫び詩歌の御詠吟有る。今夫ハ相及て東の  
 旅小赴彼業平ありとも。沖の鷗や都鳥小いぎ更向人便もかく。胡地小なるよ

蘇武<sup>そぶ</sup>の志<sup>し</sup>を<sup>を</sup> 西<sup>せい</sup>并<sup>へい</sup>を<sup>を</sup> 敗<sup>く</sup>る<sup>る</sup> 馬<sup>ま</sup>が<sup>が</sup> の<sup>の</sup> 文<sup>ぶん</sup>言<sup>ごん</sup>傳<sup>でん</sup>人<sup>にん</sup>術<sup>じゆつ</sup>も<sup>も</sup> た<sup>た</sup>る<sup>る</sup> 岩<sup>い</sup>小<sup>せう</sup>碓<sup>すい</sup>る<sup>る</sup> 浪<sup>なみ</sup>の<sup>の</sup> 音<sup>ね</sup>小<sup>せう</sup>脚<sup>きゃく</sup>心<sup>しん</sup>痛<sup>いた</sup>む<sup>む</sup>  
 中<sup>ちゆう</sup>小<sup>せう</sup>汐<sup>しつ</sup>吹<sup>ふ</sup>鳥<sup>とり</sup>の<sup>の</sup> 景<sup>けい</sup>脚<sup>きゃく</sup>魂<sup>たま</sup>を<sup>を</sup> 寒<sup>さむ</sup>く<sup>く</sup> 泉<sup>いづみ</sup>郎<sup>らう</sup>の<sup>の</sup> 呼<sup>よ</sup>声<sup>こゑ</sup>漁<sup>いさな</sup>火<sup>か</sup>の<sup>の</sup> 影<sup>かげ</sup>見<sup>み</sup>物<sup>もの</sup>聞<sup>き</sup>物<sup>もの</sup>  
 脚<sup>きゃく</sup>淚<sup>なみだ</sup>の<sup>の</sup> 種<sup>たね</sup>あ<sup>あ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup> 都<sup>みやこ</sup>の<sup>の</sup> 残<sup>のこ</sup>り<sup>り</sup>の<sup>の</sup> 脚<sup>きゃく</sup>臺<sup>たい</sup>姫<sup>ひめ</sup>君<sup>きみ</sup>達<sup>たち</sup>の<sup>の</sup> 脚<sup>きゃく</sup>歎<sup>なげ</sup>れ<sup>れ</sup> 又<sup>また</sup> 國<sup>くに</sup>々<sup>々</sup> 流<sup>なが</sup>れ<sup>れ</sup> 脚<sup>きゃく</sup>子<sup>こ</sup>息<sup>いき</sup>方<sup>かた</sup>の<sup>の</sup> 脚<sup>きゃく</sup>物<sup>もの</sup>思<sup>おも</sup>を<sup>を</sup> 推<sup>お</sup>量<sup>りやう</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup> 脚<sup>きゃく</sup>袖<sup>そで</sup>の<sup>の</sup> 干<sup>かわ</sup>る<sup>る</sup> 間<sup>ま</sup>も<sup>も</sup> 脚<sup>きゃく</sup>爵<sup>しやく</sup>陶<sup>たう</sup>の<sup>の</sup> 余<sup>あま</sup>り<sup>り</sup> 脚<sup>きゃく</sup>船<sup>ふね</sup>  
 心<sup>こゝろ</sup>生<sup>な</sup>じて<sup>て</sup> 伏<sup>ふ</sup>惱<sup>なう</sup>す<sup>す</sup> 脚<sup>きゃく</sup>食<sup>じき</sup>吏<sup>し</sup>も<sup>も</sup> 進<sup>しん</sup>む<sup>む</sup> 春<sup>はる</sup>彦<sup>ひこ</sup>辰<sup>たつみ</sup>音<sup>ね</sup>大<sup>おほ</sup>小<sup>せう</sup>残<sup>のこ</sup>れ<sup>れ</sup> 警<sup>けい</sup>言<sup>ごん</sup>固<sup>こ</sup>の<sup>の</sup> 武<sup>ぶ</sup>士<sup>し</sup>  
 南<sup>なん</sup>嶺<sup>りやう</sup> 暫<sup>しば</sup>く<sup>く</sup> 陸<sup>りく</sup>地<sup>ち</sup>を<sup>を</sup> 歩<sup>あ</sup>せ<sup>せ</sup> 脚<sup>きゃく</sup>心<sup>しん</sup>地<sup>ち</sup>も<sup>も</sup> 整<sup>とと</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup> 播<sup>は</sup>州<sup>しゅう</sup>印<sup>いん</sup>南<sup>なん</sup>郡<sup>ぐん</sup>  
 曾<sup>そ</sup>根<sup>ね</sup> 船<sup>ふね</sup>を<sup>を</sup> 著<sup>つ</sup>て<sup>て</sup> 陸<sup>りく</sup>下<sup>か</sup> 下<sup>か</sup> 馬<sup>ま</sup>を<sup>を</sup> 求<sup>もと</sup>めて<sup>て</sup> 乘<sup>の</sup>り<sup>り</sup> 春<sup>はる</sup>彦<sup>ひこ</sup>辰<sup>たつみ</sup>音<sup>ね</sup>官<sup>くわん</sup>人<sup>にん</sup>も<sup>も</sup> 隨<sup>ずい</sup>從<sup>じゆう</sup>  
 行<sup>ゆ</sup>く<sup>く</sup> 遠<sup>とほ</sup>近<sup>ぢか</sup>の<sup>の</sup> 里<sup>り</sup>民<sup>みん</sup>菅<sup>くわん</sup>公<sup>こう</sup>と<sup>と</sup> 拜<sup>い</sup>せん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup> 老<sup>らう</sup>を<sup>を</sup> 扶<sup>たす</sup>け<sup>け</sup> 幼<sup>こ</sup>れ<sup>れ</sup>を<sup>を</sup> 負<sup>お</sup>ひ<sup>ひ</sup>て<sup>て</sup> 路<sup>ぢ</sup>の<sup>の</sup> 傍<sup>はた</sup>り<sup>り</sup>  
 群<sup>ぐん</sup>衆<sup>しゆう</sup> 涙<sup>なみだ</sup>を<sup>を</sup> 流<sup>なが</sup>さ<sup>さ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup> 無<sup>な</sup>り<sup>り</sup> 菅<sup>くわん</sup>公<sup>こう</sup> 馬<sup>ま</sup>と<sup>と</sup> 松<sup>まつ</sup>の<sup>の</sup> 枝<sup>えだ</sup>を<sup>を</sup> 折<sup>お</sup>り<sup>り</sup> 取<sup>と</sup>り<sup>り</sup> 予<sup>よ</sup>此<sup>こゝ</sup>度<sup>た</sup>勅<sup>とく</sup>勤<sup>きん</sup>と<sup>と</sup>  
 蒙<sup>もう</sup>る<sup>る</sup> 吏<sup>し</sup>身<sup>み</sup>不<sup>ふ</sup>犯<sup>ちが</sup>む<sup>む</sup> 罪<sup>つみ</sup>無<sup>な</sup>ん<sup>ん</sup> 此<sup>こゝ</sup>松<sup>まつ</sup>根<sup>ね</sup>を<sup>を</sup> 生<sup>な</sup>じ<sup>じ</sup>と<sup>と</sup> 榮<sup>さか</sup>す<sup>す</sup> 又<sup>また</sup> 犯<sup>ちが</sup>む<sup>む</sup> 罪<sup>つみ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>む<sup>む</sup>  
 其<sup>その</sup>ま<sup>ま</sup> 枯<sup>か</sup>ぬ<sup>ぬ</sup> 馬<sup>ま</sup>より<sup>り</sup> 下<sup>くだ</sup>り<sup>り</sup> 路<sup>ぢ</sup>の<sup>の</sup> 辺<sup>へ</sup> 往<sup>ゆ</sup>過<sup>か</sup>る<sup>る</sup> 後<sup>のち</sup>果<sup>は</sup>る<sup>る</sup>

根<sup>ね</sup>を<sup>を</sup> 生<sup>な</sup>じ<sup>じ</sup>と<sup>と</sup> 榮<sup>さか</sup>す<sup>す</sup> 枝<sup>えだ</sup>葉<sup>は</sup>兼<sup>けん</sup>年<sup>ねん</sup> 小<sup>せう</sup>敏<sup>みん</sup>系<sup>けい</sup> 播<sup>は</sup>州<sup>しゅう</sup>弟<sup>てい</sup>の<sup>の</sup> 名<sup>な</sup>木<sup>き</sup>と<sup>と</sup> 成<sup>な</sup>り<sup>り</sup> 曾<sup>そ</sup>根<sup>ね</sup>の<sup>の</sup> 松<sup>まつ</sup>是<sup>これ</sup>なり<sup>り</sup> 後<sup>のち</sup>ハ<sup>ハ</sup> 枝<sup>えだ</sup>  
 長<sup>なが</sup>く<sup>く</sup> 這<sup>は</sup>る<sup>る</sup> 杖<sup>つゑ</sup>を<sup>を</sup> 多<sup>た</sup>く<sup>く</sup> 衝<sup>つ</sup>せ<sup>せ</sup> 手<sup>て</sup> 枕<sup>まくら</sup> 如<sup>ごと</sup>く<sup>く</sup> あれ<sup>れ</sup>を<sup>を</sup> 曾<sup>そ</sup>根<sup>ね</sup>の<sup>の</sup> 手<sup>て</sup> 枕<sup>まくら</sup> の<sup>の</sup> 松<sup>まつ</sup>と<sup>と</sup> 呼<sup>よ</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>  
 名<sup>な</sup>一<sup>いつ</sup>の<sup>の</sup> 菅<sup>くわん</sup>公<sup>こう</sup> 陸<sup>りく</sup>路<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup> 西<sup>せい</sup>三<sup>さん</sup>日<sup>にち</sup>経<sup>けい</sup>り<sup>り</sup> 脚<sup>きゃく</sup>心<sup>しん</sup>地<sup>ち</sup>も<sup>も</sup> 平<sup>へい</sup>日<sup>にち</sup>不<sup>ふ</sup>復<sup>ふ</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup> 又<sup>また</sup> 脚<sup>きゃく</sup>船<sup>ふね</sup>小<sup>せう</sup>  
 め<sup>め</sup>れ<sup>れ</sup> 且<sup>かつ</sup> 歴<sup>れき</sup>て<sup>て</sup> 豊<sup>とよ</sup>後<sup>ご</sup> 四<sup>し</sup>井<sup>せい</sup>田<sup>でん</sup>の<sup>の</sup> 浦<sup>うら</sup> 脚<sup>きゃく</sup>船<sup>ふね</sup>を<sup>を</sup> 著<sup>つ</sup>たり<sup>り</sup> 菅<sup>くわん</sup>公<sup>こう</sup> 少<sup>せう</sup>時<sup>じ</sup>陸<sup>りく</sup>下<sup>か</sup> 下<sup>か</sup> 仰<sup>あや</sup>せ<sup>せ</sup>  
 脚<sup>きゃく</sup>船<sup>ふね</sup>長<sup>なが</sup>船<sup>ふね</sup>の<sup>の</sup> 綱<sup>なわ</sup>を<sup>を</sup> 縮<sup>ちぢ</sup>めて<sup>て</sup> 脚<sup>きゃく</sup>座<sup>ざ</sup>を<sup>を</sup> 殺<sup>ころ</sup>す<sup>す</sup> 公<sup>こう</sup> 其<sup>その</sup> 坐<sup>ま</sup>す<sup>す</sup> 脚<sup>きゃく</sup>船<sup>ふね</sup>の<sup>の</sup> 景<sup>けい</sup>色<sup>しき</sup>を<sup>を</sup>  
 脚<sup>きゃく</sup>覽<sup>らん</sup> 旅<sup>りよ</sup>爵<sup>しやく</sup>を<sup>を</sup> 慰<sup>なぐさ</sup>め<sup>め</sup>り<sup>り</sup> 世<sup>よ</sup> 小<sup>せう</sup>綱<sup>なわ</sup>敷<sup>しき</sup>の<sup>の</sup> 天<sup>てん</sup>神<sup>しん</sup>と<sup>と</sup> 此<sup>こゝ</sup> 時<sup>じ</sup>の<sup>の</sup> 脚<sup>きゃく</sup>影<sup>かげ</sup> 乃<sup>すなは</sup>ち<sup>ち</sup> 斯<sup>か</sup>て<sup>て</sup>  
 又<sup>また</sup> 脚<sup>きゃく</sup>船<sup>ふね</sup>小<sup>せう</sup>兼<sup>けん</sup>八<sup>はち</sup>重<sup>じゆう</sup>の<sup>の</sup> 汐<sup>しつ</sup>路<sup>ろ</sup> 小<sup>せう</sup>湫<sup>しゆう</sup>と<sup>と</sup> 筑<sup>ちく</sup>前<sup>ぜん</sup>國<sup>こく</sup>博<sup>はく</sup>多<sup>た</sup> 袖<sup>そで</sup>の<sup>の</sup> 浦<sup>うら</sup> 脚<sup>きゃく</sup>船<sup>ふね</sup>を<sup>を</sup> 著<sup>つ</sup>是<sup>これ</sup>  
 陸<sup>りく</sup>路<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup> 守<sup>まも</sup>り<sup>り</sup> 國<sup>こく</sup> 脚<sup>きゃく</sup>堂<sup>だう</sup> 郡<sup>ぐん</sup> 太<sup>たい</sup>宰<sup>さい</sup>府<sup>ふ</sup>の<sup>の</sup> 郡<sup>ぐん</sup> 司<sup>し</sup> 秦<sup>しん</sup>民<sup>みん</sup>部<sup>ぶ</sup> 時<sup>じ</sup> 負<sup>お</sup>か<sup>か</sup> 脚<sup>きゃく</sup>舎<sup>しゃ</sup>  
 入<sup>い</sup>り<sup>り</sup> 民<sup>みん</sup>部<sup>ぶ</sup> 兼<sup>けん</sup> 都<sup>みやこ</sup>より<sup>り</sup> 下<sup>くだ</sup>知<sup>ち</sup>を<sup>を</sup> 承<sup>うけ</sup> 四<sup>し</sup>方<sup>ほう</sup> 小<sup>せう</sup>堤<sup>てい</sup>を<sup>を</sup> 築<sup>ま</sup>り<sup>り</sup> 其<sup>その</sup> 内<sup>うち</sup> 高<sup>たか</sup>塚<sup>づか</sup>を<sup>を</sup> 作<sup>つく</sup>り<sup>り</sup> 館<sup>くわん</sup>  
 を<sup>を</sup> 造<sup>つく</sup>り<sup>り</sup> 設<sup>せ</sup>て<sup>て</sup> 待<sup>まち</sup>受<sup>う</sup>け<sup>け</sup> 即<sup>すなは</sup>ち<sup>ち</sup> 其<sup>その</sup> 館<sup>くわん</sup> 入<sup>い</sup>り<sup>り</sup> 監<sup>かん</sup> 卒<sup>そつ</sup>と<sup>と</sup> 付<sup>つ</sup>て<sup>て</sup> 嚴<sup>げん</sup>く<sup>く</sup> 脚<sup>きゃく</sup>門<sup>もん</sup>と<sup>と</sup> 衛<sup>ゑ</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>

菅公於配所詠詩歌 太宰府飛梅追松之條

菅公已小配所の館へ入せりゆれを都の官人下吏之脚暇を願ひて京へ歸り跡小  
り留る者と云田口渡會其餘六言甲斐下郎三人のこゝていそ寂莫く思召脚館と

ても壁浅間小板間の中粗少く透間洩汐風もいそ脚身小涼を一時の脚詩小

離家三四月 落涙百千行 萬事皆如夢 時々仰彼蒼

と賦一のり宰府へ人も尋折の脚訪ひ来る人も有るも墓く物言言

多々の脚對面ゆりむさ引筆がらふて唯異國へ推移される心地のい支訪

白たる衛鷗の声も脚夢を破る媒となり音信や軒の松風も却て脚涙を誘

種となり万吏都小妻も吏の多きして且多かるめぞ不過きもの一時遠方小

煙を脚覽ト

夕ざの野の山も山煙たげれよりこそと見えたりけれ

まよ雲の浮きたるよを見ぬひて都の空乃となり思召

山よりれとびゆ雲のくまらる影もとた猶たのまれぬ

世八憂ももの思捨かへ猶故洛の期もと思ふふあるが雨の降る日

あめ乃く隠る人のふるねをきてわねぬひるよりゆたれ

月乃明くく夜の脚哥小

うみあつむく水の底までも清た心を月ぞとらん

野を詠ト

はくも紫ゆる野をふれどあれ各はむ人をまえぬ

道を詠ト

苜萱乃園もくもく乃もくもく人の中もさぬ道成なり

山を詠ト

あし曳乃くあそかた小道はあれど都へいざとらん人のたれ

鷺を詠ト

漢ふくく春のひくろのむを雪ふけりる鷺乃一也

有明月を詠ト

宵の間やまよはれ空よりまもせで心づくの有明の月

誠と云意を詠ト

心づにまよと乃道ふるの心かむ祈むとも神や守らん

右の御哥の意を天道の善小福を与へ悪小禍を下まの理双一首の中述更

此一首の御歌を心小持人を貪怒非分の望を非難と更たれ難有御哥小

邪怒乃為小神を祈る愚昧の族を誠と云神詠たり又一時の御哥と云

見る石乃わめての塵もふくむる節の揚枝もつるがごとし

是ハ京童の言州小竹の揚枝をつる者硯の塵を吹者ハ無実の難を受るがごとし

我は従て御身小犯一の罪家多れも饒者の舌頭小くす斯左近の客となる更よ

と歎息のひての御哥なり又一日旅馬の日は於御覽ト賦一の御詩小曰

我為遷客汝未賓 共是蕭々旅漂身

歌抗思量歸去日 我知何歳汝明春

斯詩歌を詠一のふ付ても御身の不運を悔むるを痛くする去程小月

日小関守なり御憂愁の中の中春去夏過て秋も稍三九月十日のたり去る

昌泰三年九月十日の夜清涼殿小て菊花の御宴あり一時菅公も御座小列あり

献トのひ一待小曰

君富春秋臣漸老 思無涯岸一報猶遲

帝右の詩を睿覽なりひて御感の余り小御衣を脱ひて被させのひ於菅公

舞踏して拜領一のひくろ其御衣を筑紫茶すも持せのひ君の御記念で常上段

乃筭小納り朝夕小拜礼の入り此条とて菅公帝と聊も恨むむささる吏と知  
足り然小今九月十日かれを去年の今宵の吏を思ひ出りぬ絨小人界の栄枯定  
かく盛衰堂と覆が如かるを長歎しぬひて作らせり又御詩小曰

去年今夜侍清涼

秋思詩篇獨斷腸

恩賜御衣今在此

捧持毎日拜餘香

絨小懐旧の御愁情の程と悼まらるる。ぬふ秋の物悲し秋の上風秋の下  
露路離小すく虫の音も何と御涙の種ぬりぬり。程か九月十五夜小あり

一天雲かく霞て月清朗と澄昇多と御覽する小都小在せ時殿上の月見の  
御宴小侍もひて詠奇詩作小懐と迷真に樂ませぬ。今小盧生を愛と感

黄萎顔色白霜頭

况復千餘里外投

昔彼采花簪纓縛  
今為敗謫州某由  
月光似鏡無明罪  
風氣如刀不断愁  
隨見隨聞皆慘慄  
此秋獨作我身秋

斯御物おもひごと月旦と送るを御痛り。柳太宰府小都府樓とて  
天智天皇の御宇小建られ官舎有又小帝の勅願小御建立有観音寺

と又梵刹もあり菅公兼て観音と御信仰在。和州初瀬寺の縁記も自  
筆小書せぬ。一程の御吏なれを御糸結由有なれぬも不出門とて門を出

見かぬ一時不出門と又題して作らせり又侍小曰

一從請居就柴荆

萬此兢兢踏踏情

都府樓總看瓦色

観音寺只聽鐘声



中懐好逐孤雲去

外物相逢滿月迎

此地雖身無檢繫

何為寸步不出行

就中都府樓觀音寺の二聯と。唐の白樂天が遺愛寺鐘鼓枕聽香炉  
 峰雪撥簾看と賦せ。對句も勝り。其頃の博士も感賞せると名  
 斯て配所小幽居。其年の冬。首庭前小一夜の内。一株の楝樹生出  
 庭前。のり。小実の昨日まで無。梅樹兼てより生。如更今植  
 樹と云えず。己小每枝小蒼を生。辰音春彦奇異の思ひを。公  
 小斯と言上。公も不審。ひて見。小兩人の約。い。不測。思  
 熟。是。小將。是。都。の。紅。梅。殿。小。植。い。御。愛。樹。の。紅。梅。な。り。を  
 膝。を。拍。て。難。息。い。是。六。我。都。小。多。年。愛。せ。楝。樹。な。り。是。小。就。

思ひ出せし事あり。予都と出折。紅梅殿。立寄。小此梅感。由。都  
 の春の余波。東風吹む。白ひと。戲。口號。小其敬。小感。下。ん  
 山海數百里。隔。此。筑。紫。ま。飛。来。更。不。思。議。の。中。の。不。思。議。な。り  
 草木非情。と。い。ち。子。伎。初。の。歌。小。感。主。を。慕。ひ。て。来。優。構。て  
 小枝。折。取。更。勿。れ。曰。い。都。と。出。い。今。日。で。二。度。も。笑。せ。い。更。無  
 小此時。始。て。笑。せ。い。御。竹。晚。の。色。あ。ら。れ。る。辰。音。春。彦。も。公。の。御。銅。小  
 就。て。梅。樹。と。立。周。て。左。見。右。看。小。実。の。紅。梅。殿。の。梅。小。紛。小。小。れ。を。感。歎。し。て  
 止む。心。あ。れ。下。僕。も。も。感。涙。然。を。流。是。下。り。菅。公。小。前。小。信。て。愛。し  
 め。い。御。夢。去。の。後。神。小。鎮。祭。ま。い。小。或。人。此。梅。の。枝。を。折。く。を。御。神。託。小  
 な。と。け。あ。り。折。人。つ。つ。宿。の。王。の。謀。の。も。枝。を  
 と。詠。し。ま。せ。い。太。宰。府。の。飛。梅。是。な。り。其。後。都。の。言。便。小。紅。梅。殿。の。御。愛

樹の内梅一夜の中維が枝取らん影ふ見えずたり櫻ハ枯果残るハ只松乃  
かりと安えし菅公嗟歎しひ詠ぶの御歌小曰

梅ととびさううハ枯る世の中小松むりこそほれあうりえ

斯詠しませのひる小其翌朝庭前小木の松生出り辰青春彦公下の

人々又大い怪しよりん小是も都紅梅殿の御愛樹の松小幹も枝ぶりも

彷彿れを菅公言上る小公立出て見の人心將是紅梅殿の松小又紛

ぶくもふれを奇異の思ひをたしめ梅ととも小朝夕同れせど愛しめて

配所の徒然を慰めりひる公の御跡を追来し成て追松と呼ひし後

世小い何時老松と文書と換る斯て延喜三年正月の末つうう菅公

御異例小深きせのひれを辰青春彦大い孩れ郡司泰民部と高議

遠近小良医成来て御来と勸をり神佛小祈誓して日夜御本復を祈り

これとも墓々々其驗も見えさうり然小二月の上旬小都小苗置のひ嶋

田忠臣下向と配所恭上りこれ菅公近く召れ珍々忠臣予が都と出後

朝廷小變り義ハかたう主上小御安齋小在すたと問せの忠臣とと御答

置小平伏て少時涙小れ君うらるる稍有て頭を上帝ハ御安寧小りてせ

めども左大臣殿入政を執行れいも僻吏多く万隻の訴詔滞りちちむ

都鄙の人民歎うすとい者かひ我君都成出のひ後左大臣殿の命とて御

門人方と流刑小行人と沙汰ありれも左府の御舎弟大納言忠平殿

成練止れいひい其議ハ止いも御門人達も其より後難を怕とられて御

其姫君の御務小忝らう人も希く小わ行只彼大納言忠平殿の折節小

音信の使者とさ越れ御臺所小君小御別あてより昼夜御歎た深く

終小御患病小うづひの良医の配劑も其驗なく去ぬる正月十二日の夜某

汝御枕頭へ召れ御香炉香爇小と把出させのひ。筑紫小在と我君へ女が  
記念小御賢せよとせと曰ひ姫君達の御更をもよめ小御遺言かたすの  
其曉終小眠りまじく御終焉かたのひのひも御葬式をかり果姫君達と御  
一門方へ預けまわらせ漸都を奔走仕り只今ヲ矣小著けいといと言上涙を流し御遺  
物の品々成呈しられを菅公御覧が愁々として御落涙すりくると忠臣辰  
音春彦們はまじり御心中と推量進み書々吞で悲泣する。菅公氣と厲し  
かひ你們愁傷する更勿と生死素り天數かり。妻の死波悔小足す只歎る  
しれ小主上御年若く侍臣の言と信じゆい左府時平小政柄を執せの更下民  
の愁ひ朝家の義とや成めん古人も縋すや悪人と國の害浅く侍臣の國害深  
くとも聖明の君も時平小政を委女つる遂小不徳の君とや称られむん噫  
是も天かり命たり人力の私を以て奈何ともすべし乎くとして忠臣小向ひのひ

あなたを伴ふと都へ歸り。残る女どもの必抱せよ且此一終と予が配所小吟詩  
文たり持之りて中納言長谷雄小達せよ即ち長谷雄へ遣すと消息入道の  
一齊世の宮大納言忠平へ呈する書翰を封中小電りりとして差出のひ  
忠臣の辰音も大系致た忠臣先ずる八御旋及しなり公心多くいども御臺  
所御逝去まじりくとも姫君達ハ御親族方へ預置其ハ君の御先途と見届  
ちもんりめ下向仕りむ此御使ハ余小命付られ其ハ御膝下小て召使せり  
願小と辰音も言と養。某身不肖小いども君都と出のひ一時より隨從仕り今  
日ぞ仕へまじり君先頃より今にて御不例小言とせのひを見捨たり争う都へ  
歸りいれ只此終小て召使せり人と致た願も敢て許すむと。你們ハ中處理小  
似されも予ハ病も今小稍息りて治す小程あり。閑暇の配所給仕ハ春彦一人小  
更足かん數々の女ども母を亡ひて便りごと思つめを忠臣一人小て更不足

此封物を用ぬ小於永く主従の義を断ずると平貝温順采和の菅公由言厲  
しく曰ひ多んを兩人も其嚴威小怖と再び御辞退中上る斐能く不本意か  
己斐を得ず領掌一多。菅公色を和げの御一門方姫君達への御傳言と言  
合の御暇を給々も嶋田く只拜辞して春彦後の斐もより頼れ  
御封物と持して遂小力か筑紫を去て都へ上り多

因小曰此時兩人小渡一の御草稿昌泰三年八月家集を献り  
後配所小あり多時々の御詩集たり菅家後集も菅家後  
草とも号て一卷あり其中三十八首筑紫へ赴るまでの御作なり

菅公天拜山祈願并薨去 渡會春彦忠實先去條

嶋田忠臣田原音己小筑紫を去り都へ上り後菅公御居室小葺  
り何れあむと細密と書と書見紀の春彦小命て彼飛梅の新枝と枝

折して其小右の書物を持し備一七日の間齋し多て後春彦小向ひ予深  
れ心願有て是より近れ山に登り七日の間天小祈を欲せり最七日の間祈食  
あれを食物を運小不及敢て你山登来る斐勿れ仰れを春彦大小建て  
ヤヤ御旋小ていひ多時今二月の半也然由余寒強く小御不倒乃御身小て七  
日の内祈食し多て山中御筆ある斐斐御身小宜し多何斐の御祈願  
の存小のとも今昔く春暖の時節小及び小待せり其内小御患病由治  
る小と練より多也菅公敢て用ひ多是你在知所小あず満願の後子細  
を語ると斐祈願の内決して登山成不許り此言を用い多登山せ予が昔  
心画餅となり願望不叶斐と予山中の岩小首と觸て死をを構て予が言  
志却する斐勿れと強く緘めり多春彦深く此言を然口上六御願の満り多  
登山致すやかくいと領掌や上る菅公今ハ心場と思召浄衣と著換りて件の

新枝を携へし配所をま出りふど。春彦ハ覺束ふ其山の麓まで召連りて  
 強て隨從しうる。菅公も座の高山の麓下りり。春彦を顧みて。你是  
 より還り予が留守と衛よ。先の中やせせとて七日満すまで登山せとて。誠の  
 袂を分ちて只脚入山路を登りし。春彦却背影の見ゆる限り見送り進  
 せ心恍惚とて山上を又上停まらぬ。脚絨強を山に登る更能と為方なく  
 心ゆきも配所へ歸るとも。君の御身の上を煩想て起居安らふ。夜中抗小就も  
 月も合と終夜耐とて夜を明。明も又彼山の麓下りり。脚姿のよる更  
 やとて。東西南北と路も無山下と回りれぬ。脚姿を坐も入も更能と針針  
 配所へ還り。又氣遣しふ山の麓下りり。如此七日間往及數回心を勞ふる。去程ハ  
 菅公ハ險峻なる羊腸を登り手て山頭へ到りし。一塊の巖の有る其上へ登  
 りて携へし新枝を携へ願書と天小棒の御足の左右の大指むらりて翹る

暫く天を拜し其後脚眼を閉心不乱祈りし。何更の脚願ふいざ不知も。も  
 菅公ハ天性虚弱く在る。断食不飲して。去る巖頭ハ翹ち七日七夜。同利那  
 懈急なく祈り。更実ハ雞中の雞。勇猛強勢の甚行者たり。半日中堪る更  
 雞も登り。ぐる丹絨を高天も感。いん七日満む。曉天地俄ハ震動して雷電  
 鳴閃くと等。一陣の旋風吹奔り。捧り告文を天上遙吹上。脚手ハ梅の新枝の  
 と残りたる。菅公脚喜悦斜あす。今こそ道真ハ大願と皇天納受り。よりとて天  
 に向ひ九拜し。巖を下り。林下下り。山下ハ渡會春彦疾より待りけ  
 し。更ふれを大弟怡び其御安睡を質し。隨從と配所へ還り。脚湯漬か。勸め  
 ませぬ。菅公此も用ひ。おむ。脚纏の上。お。ひ。急。と。眠。去。り。か  
 ひ。時ハ是延喜三年二月二十五日。なり。春彦斯もあらず。脚疲劣。て。脚。寝。あ。り  
 一と心得。其。脚。傍。直。宿。し。る。日。も。暮。夜。も。初。更。亦。及。金。も。起。玉。を。余。り。か

不審も怖多し御枕頭へ膝行して窺ふ御寐息もあらざる。大糸綱りごと  
 御手と採て脰脈をさす御手水のどく冷まり六脈已に絶ぶ。至るに於て發せし  
 て驚た強だ急お下僕を呼て郡司民部が邸舎まで斯と報せしめれば民部  
 も大糸發た醫師を引將て馳参り茶湯を用ひあがて百般扱ひせしむる再ひ蘇  
 生をなぐくもあつたれを衆一同涙淫の涙を瀝た只歎息をなぐりなり今春  
 彦八月日も憑きまじ公別と進も愁傷一方あつた我を忘し書を放て慟哭し  
 々々と民部是を練諭し先急使を仕立て菅公御薨去の由京都へ往進し諸御  
 我棺お収り御葬式を整へ御棺と車小乘り御葬の地、大宰府の四堂の側と  
 定め配所を出しなり御車の春彦付添四人の下僕是を押し民部時負と尋勢  
 して御車の前後と警固し四堂を臨で送りなる然お菅公薨去のひり更と維  
 か言傳るもなげ遠近の人民ぞ知て悲泣せざる者なり御葬式を拜せんとて路  
 両側小群集涙を流し佛名と稱て拜し多斯て御車と押往とちり途申お於  
 て御車止りて些も動ず是何か多かやと尋勢の者力を係と押どもく大  
 般石の地より生しとく一寸も動ざれを春彦民部と相議し御車の此地お止りし  
 此地お葬まよふ御更あるやとて遂に御車の止り地おと葬りなりとて今  
 神席の地是なり斯て御葬式も相済され民部は従来と將て歸り。臣等従  
 ひまろて筑紫へ下りの下僕も已に故郷へ歸りたり。口、春彦の御墓の側  
 お菴を管と喪お籠りて朝夕御墓を掃淨め水と手向花を供し。死お事る更  
 生お事るが如し郡司民部其誠心を感じ。米新を贈りて飢渴を扶けたり。彼孔門  
 の子貢と孔子の家を守りて家の上お盡さる更六年。我朝の良岑宗貞由仁明帝  
 陵墓を守る更三年人ひて其忠悌と賞美せり。渡會春彦も是木の先哲お劣  
 す。其身菅家普代の臣おあつたれ。菅公御誕生の始より筑紫おて御薨去お

皇亮己圖會後篇卷之九

まで昼夜勤仕し猶脚墓を守りて盧する。翌二年延喜四年二月廿五日菅公  
一周忌の御命日不當てきて病お癒るもたゞ沐浴齋戒し中臣の杖を拜し  
安佐とて率去りたる行年八十五才とてまへに後神お祝しあ菅神の撰社とす  
白太夫の宮ハ此春彦が更なり。絨お希代一人かりたり

因ハ曰菅公の天を拜しゆい山茂土人天拜山と号り彼岩を天拜岩と縋り  
寛平法皇築雙岡 法性坊夢調菅公亡靈條

惜哉北院乃春の花不帰水お徒て流奈何せん西府の夜の月不露して虚名  
の雲お入さし朝廷の忠臣と叫れゆい右大臣菅原道真公五十九才めて如月の  
梅花と俱お散て西府の土お帰ゆい更早く都お去りて姫君達の脚愁傷を  
ゆゆ中へ疎おて脚一門を首無縁の月卿雲客數ありぬ市人農民とぞ老とたけ  
かたたく惜と歎くをハ無王とる小只時平方の輩ハ菅公ゆい左近思免の結とて

飯浴ありて終奏の罪露見し如何なる脚処を蒙らん量じと皆安んじゆあくる  
くろ小己お洗髪おて薨去あやと時平も先定岡以下の奸徒目の上の痛と除  
し心地と大小お拾ひ始て枕を高く各森會と酒宴を催し賀を演てぞ樂する  
茲小寛平法王とて共お菅公の左近をり者んと脚裏も棄す脚森内かりゆいお  
奸臣们お妨げられゆい。本意かり還脚かりゆい後世お憂も小思召たりとら  
菅公終小薨去あやとせせゆい。心まゆ脚衣の袖を哀涙お浸しゆい。時平  
以下の逸者を恨し悪ゆい都の方を見も嗔唾の種なりと思召仁和寺の前山を蒸  
くせゆい。其築山二峰なり。世小雙岡とて呼名する。是仁和寺より都の  
んえがる為の目隠しなり。斯て法皇ハ御室小園薨ゆい。朝夕菅公の善授を吊せむ  
ハ脚座の側小菅家持歌の書物を置せゆい。脚後並つ折ハ是を脚賢ハ菅公  
小脚對面なり。脚心地おて脚心を耐ゆるも難有なり。脚更あり。菅公の脚靈ゆ

さこと忝め思召らんと覺へん。菅家の御書物と申ハ

菅家文集 一部 菅家文章 十二卷 日後草 配所御作 待一卷

菅家万葉集 詩合 二卷 文德実録 一部

類聚國史 二百卷 文選文集 一部 以上

其後法皇六朱雀天皇の承平元年七月十九日仁和寺小於崩御なり

山崩御の後八世入御室御所之と御門跡と申す。是ハ御門跡と言ふ也

因小曰後代小至てハ門跡を官名の如く言ふ。後年追く門跡と稱する官方

- 敷山三門跡 妙法院宮 青蓮院宮 梶井宮
- 三井寺三門跡 聖護院宮 圓滿院宮 實相院宮
- 東大寺門跡 勸修寺宮

奥福寺門跡 一乘院宮 大乗院宮

醍醐寺門跡 三寶院宮

右の外 大覺寺宮 安居宮 竹内宮 智恩院宮

関東日光宮 等 其餘數多有又准門跡と稱するも略之

菅公御薨去あつて後天神地祇朝廷の忠臣の冤死を怒りいん浴中浴外

厄難數度小及び古語も一夫怨を三年登且一婦恨を百日雨降むと習り

是乃万物の長生靈を苦まむるを天地も小怒り増て況や菅公の

如丸大賢人を困り進せ小於也。先其初延喜七年八月九月西月小浴中浴外の

神社佛閣の境内小植する梅櫻桃海棠と首と山吹杜若以下の草花小り。是乃

花咲を是ハ珍れ更ふも貴賤も老若男女の差別なく群集して是を見

回りくる心ある輩眉を擡り例年飯咲といふ手妻の更あれと是ハ夫と更



菅公  
紫雲山  
拜天  
願  
祈

菅公紫雲山拜天願祈



菅公紫雲山拜天願祈

変り秋の半小緒の草木一門の花咲き前代未聞の珍事なり。此未何かる世の  
 往らんと私結合ぐり帝の致れり天文博士陰陽博士亦小考をせり亦何方  
 由重た御慎みて殊小公卿の中凶変のいざと勘文を上りて奏聞しんば王上  
 深く怕りひ宸襟安らぐ。諸寺緒社小詔命ありて災変を禳ふに加持祈禱  
 を修せりちのいづ。其中の睿山の法性坊尊意僧正とや智徳兼備乃名  
 僧にて天台止観の真旨を究三学三論ハリ不及一切緒経の深理に通せり所  
 も無りたれど一山の僧徒推尊し山門の字頭と帝も深く御信仰在天台座  
 主小任りて今度第一番小消災の加持を修すべしと宣旨と下されり此僧正ハ  
 菅公ハ師檀の睦ハ深く公の御在勤中ハ互小往來と侍を作り書籍の討論  
 たびは合のいれむ。菅公の左遷せられりといふ事歎れり何幸折を得る帝を  
 中若め菅公の左遷恩免を願ひもんと思ひりも後者朝廷ハ充滿て其

便を得り寸後小年月を送りて内終小菅公薨去り又且と菅公ハ僧正哀悼の  
 涙小三衣の袖を絞りて會者定離の理りと観せり亡跡を吊ひ進せんと朝夕  
 妙経を讀誦しり小禁廷より災厄消滅の加持を修すべしと倫余下り  
 僧正勅命小從ひ別所の菴室小困菴り丹絨を抽下り加持の修法を行ひ清  
 して御座る所一夜菴の扉を叩き入り僧正數珠の手と止維とと懺へ  
 扉と開れて月影小其人をいふを宣せり去ぬる延喜三年二月西府より菅公  
 のいとは菅公ハ菅丞相衣冠正々易於把て侍立り其顔色ハ稍憔悴して  
 又入りて僧正甚と訝りり思ひり子道真公御身ハ五年以前筑紫にて  
 菅公のいり傳書素より師檀の契深き御変あれを悲愴小堪む。せめて後  
 世佛果を得るべき朝暮御跡を吊ひ小在り小変りぬ對顔をなすも不  
 思議さよ先此方と結入宿王座定りて有合拓摺を出し湯と進し世

られ諸今宵何の光臨なりと云ふ菅公答ふは。絨の弟子道真無  
 実の虚名暗と五年以前西府の雲と消五温の形を市中の朽果れも一念の無業尚  
 陽土の遺と。抑道真不敏なりとも。君王の御為毫髪も私に存せず心を小  
 己小克て御代を。と。意穿の化を比んと。肺肝を確し其甲斐なく。終吉の為小叔逆の  
 汚名を称られ無事とて父子五所不續せしむ。妻其恐無小あ。是六時乃不  
 肖身の不運不捷なれ。露新の君を恐む。心は。然とも。時平以下の純徒君を  
 言惑し道真を退し罪を天帝敢て怒し。遠くすして帝國の災厄を降し  
 佞臣を罰し。みんか。か。を王宮の天災の及。期。暗。其災。變。と。穢。人。朝。家。よ  
 して。尊。師。を。召。す。妻。い。を。願。く。ハ。妻。を。左。右。社。と。下。山。し。の。ら。む。天。威。の。逆。ひ。も  
 更。勿。れ。此。義。を。告。す。ん。ん。あ。仮。形。を。現。し。尊。顏。向。ひ。い。け。り。と。曰。ひ。僧。正。ま。り。し  
 て。仰。ら。し。所。理。の。至。極。小。天。帝。佞。臣。を。罰。し。の。ら。む。と。い。ふ。君。より。貪。道。を。召。す。とも。二。度

まで八堅く辞と下山はるす。これ。も。普。天。の。下。玉。土。非。る。ハ。か。率。王。の。質。王。の。民。小。非。る。  
 たり。且。我。山。の。玉。城。鎮。護。の。為。小。支。置。す。所。が。勅。使。三。度。の。及。び。て。是。日。不。應。せ。ざる  
 更。能。く。斯。程。の。理。ハ。凡。庸。の。徒。也。并。知。い。ぬ。況。や。貴。卿。於。此。や。と。仰。る。小。菅。公  
 再び仰ら。御言なり。勅。使。と。氣。色。を。損。ず。れ。菓。子。臺。の。柘。榴。と。採。て。嚙。む。を。い  
 妻。戸。小。ま。と。吐。け。り。又。心。柘。榴。ハ。忽。ち。猛。火。と。かり。妻。戸。小。燈。付。燈。と。燈。す。る。を。僧  
 正。公。然。と。強。だ。む。と。手。小。灑。水。の。印。を。結。び。の。ら。む。と。等。く。今。ま。で。燈。を。妻。戸。の。天  
 消。息。と。て。消。其。煙。亦。終。止。菅。公。の。姿。消。失。の。思。ひ。を。俄。然。と。て。脚。眼。覺。是  
 一場の夢。小。有。多。僧。正。奇。異。の。思。を。な。り。我。菅。丞。相。を。追。慕。す。心。深。た。り。ハ  
 くる。奇。怪。の。夢。を。ん。ん。是。思。夢。か。を。登。り。然。も。内。裏。の。天。災。を。示。し。下。山。を。止  
 られ。成。以。て。考。す。を。り。実。海。水。や。と。虛。実。兩。端。を。定。め。り。又。加。持。と。修。せ。れ。り  
 貝原先生の著され。太宰府天満宮故實記。小。菅。公。の。靈。磨。山。の。法。性。坊。の。許

小のう。我天帝の免を受て雷神とわ内裏へ落て錦奏せ。徒を摺殺すと欲す内裏より召さるも師下中の更れとせられざる。不法坊勅使三度小及なむ辞する更然るも召されざる。菅霊怒りて栂栂の嘯と妻を吐けられぬ。妻多煙多々々。師瀧水の印を結んで是を消れらる。さう書傳とれど甚く信じては鏡おておく。後世の遺疑なる。菅公寛のめ左辻せれ。どの天命ある公悟りて聊も君を怨むの言を。然も何と死と雷神形神と成る。是は菅公を小崇んて種。乃て鏡を殺し邪神とせざる。更却て神威を損と理して最も恐ある妻なり。内裏の三度火焼。時平以下の死を善せり。天道菅公の忠誠を感。竟と雪だ無事と露まん。あ怖れた天竺の降。所にて敢て菅公のた。又小罪を。錦者の徒雷を撃れ。或は死せり。天道悪小殃。一も理して忠臣無二の菅公を錦奏せ。罪大ゆして天誅小遭るなり。

是自業自得とらふ。あ人のさうく。舟かぶる。東本と。此鏡賊

小公論と緇公。世上は菅公雷神成り。と思入ま。甚くは僻変を。予素り。貝原翁の卓見。伏す。つ。も。蘇小栂栂天神の二條と載る。の古くより書傳へ人の能知。鏡を。是を捨す。只。辱れ。托と。穢者の責と塞。

洛中天妻内裏雷災 奸徒雷死法性房行方條

延喜七年も暮。八年の春。おり。れ。も。何の異。妻。あ。り。な。れ。是。全。く。加。持。祈。禱。の。功。力。よ。り。所。か。う。と。上。二。人。う。下。万。民。ま。て。我。安。介。多。小。其。年。の。秋。八。月。十六。日。俄。に。暴。風。吹。出。し。洛。中。洛。外。も。大。木。と。根。が。吹。仆。り。堂。社。人。家。の。屋。根。を。吹。捲。り。端。の。小。家。も。吹。倒。さ。る。も。妻。が。加。え。ち。ず。大。雨。降。出。と。賀。茂。川。が。洪水。溢。り。川。下。の。人。家。百。五。十。軒。忽。ち。水。の。う。め。不。押。流。れ。溺。死。す。者。夥。し。牛。馬。雞。犬。の。水。死。す。六。千。も。數。ま。れ。ず。是。が。ま。へ。希。代。の。大。変。と。わ。と。下。顔。如。來。怖。惑。の。所。小。午。過。頭。より。雷。電。凄。く。鳴。閃。光。白。

登きかゝる暗夜のく風雨倍屬く成るに貴賤も魂を消し女重は泣叫令  
世界も滅し大なる危き。殊更内裏の雷鳴はて駭く雷の落る處幾所も  
敷あす。誰か言出せ。此天災は無罪大臣殿を左遷去のいへ。菅公の死に當り  
崇成がしる所なりと言置り。百司百官君と守護ももんもせと周障狼狽し逃  
強だる。申由大納言清貫を菅公の崇なりと定て大に恐怖し。至上の御座す常  
寧殿へ逃避んと後涼殿の廊下とまり。小眼前へ一團の雷火噴き。落るるを清  
貫とて魂断て尻居ふと。行々其内水干の袖に雷火燈付れ。益發周  
障火を消へ。廊下と轉り。救つと。此所へ再び霹靂大に震鳴。清貫が五  
の上落る。何れも堪ふ。首も手脚も切。小成煙り。及て水干も目も當  
らぬ。風情なり。右中糸希世。周障強然大庭へ。逃下る。雷火のく。小舟を焼。して  
死。負文の勇氣を以て難を遁と。弓矢を番へ。引張て。逃行を雷神近付す

蹴殺し。死蔭連八船もむせ。死し。其時平小一味。葦公急ぐ。雷の為小聲  
ま。此のく。弥菅公の祟也。と恐感ひ。左大臣時平も。今度の天災。大に菅公の祟  
あり。と一途お思ひ。と恐懼し。奸智を回し。先定國菅根。亦向ひ菅丞相在世の  
時。帝と重ん。敬重小過。其亡。聖の玉體。小近付。更ハよ。あ。君。小。と  
て。居。を。雷。難。を。遁。る。を。り。と。言。れ。る。を。皆。む。と。は。意。帝。の。御。座。へ。糸。を。玉。體。を  
守護。も。も。り。を。名。く。四。人。も。御。衣。も。り。付。て。戦。慄。も。素。素。り。雷。火。ハ。菅。公。ハ。靈  
の。為。と。も。う。わ。れ。れ。も。流。石。十。善。の。天子。乃。威。小。恐。と。玉。體。小。咫。尺。更。ふ。る。れ。を。後。者。の  
面。も。僕。伴。の。雷。難。を。免。れ。る。も。風。雨。雷。電。尚。止。む。日。已。小。暮。れ。も。燈。燭。を。点  
する。人。も。なく。宮。殿。皆。暗。闇。か。て。只。透。間。か。肉。く。電。光。の。影。凄。く。此。所。彼。所。小。泣。叫。女。房  
と。重。の。声。叫。喚。大。叫。喚。の。地。獄。の。斯。と。怪。し。れ。る。左。府。時。平。心。付。帝。小。向。ひ。り。唇  
山の。座。主。尊。意。僧。正。を。召。し。加。持。さ。さ。る。天。災。の。止。む。更。も。い。と。奏。し。れ。帝。突

由其義を忘るる急ぎ勅使を尊意を招き寄りと詔命ありき。左府奉り  
 心利なる人を探し勅使として山門に遣はる。此時夜半曉ふなり。時平又思惟  
 勅使途中にて遅滞す。更もて。又續て二番手の勅使を遣はる。尚  
 心安堵す。又引續て三番手の勅使を遣向ゆ。去程小一番の勅使風雨  
 を犯し。私馬小鞭を加て私か如。摩山。菟著法性坊より勅命と述て急ぎ参内  
 あり。と急ぐ。是より前小尊意僧正六浴中の天変を定て去羊の夢を思  
 ひ合れ。斯て参上す。勅使を来して召さる。夢も夢申あらず。僧公つがひ  
 知ゆ。あれが二鷹の脚名あを辞退して下山す。菴室小閑筆電て御座る。果  
 て其短。朝還し。勅使入来あり。火急参内。夫妻の鎮る。加持せ。と  
 倫命と傳て下山を促し。る。僧正。老僧。頃日所劣。此菴室小引。筆電。六下  
 山。難。無。勅命と黙止。菴室。雷雨を鎮る。秘法。修

此旨。回奏。とあり。い。られ。勅使。推。御所。勞。い。一鷹の脚  
 辞退。する。更。い。今。度。の。天。災。の。事。常。々。此。菴。室。に。集。れ。菴。公  
 の。崇。も。れ。か。自。他。も。僧。正。を。伴。い。て。ま。ま。の。勅。詔。小。脚。勞。煩。あ。が。是。非。も。小  
 脚。参。内。あ。れ。と。い。れ。る。小。僧。正。猶。辞。し。て。ま。ま。の。事。菴。公。の。崇。も。あ。れ。天。帝。の。咎。も。  
 あ。れ。拙。僧。の。修。法。小。止。む。を。内。裏。あ。て。修。す。も。當。山。に。て。修。す。も。何。理。あ。り  
 先。脚。還。有。て。可。茲。奏。聞。し。て。敢。て。下。山。す。も。休。え。玉。を。勅。使。憫。も。て  
 是。ハ。奈。何。す。と。い。れ。る。當。惑。あ。内。又。二。番。手。の。勅。使。混。沾。小。成。て。強。著。参。内。と。促。す。更  
 以前。の。知。り。され。も。僧。正。先。の。と。い。て。下。山。を。固。辞。せ。る。内。間。ゆ。か。三。番。手。の。勅  
 使。急。に。て。菟。著。参。内。を。更。頓。り。僧。正。も。勅。使。二。度。ふ。乃。上。六。辞。す。小。脚。か  
 此。上。と。て。先。三。入。の。勅。使。先。に。其。身。小。車。小。乘。て。摩。岳。を。押。下。ら。鴨。川。と。一。散。小  
 押。行。り。ゆ。い。り。早。鴨。川。を。洪水。漲。り。水。勢。岩。を。流。す。を。自。浪。平。有。様

と船小も猶涉ぐとんえり増て馬車かて越ん更熊をさし中うふれを三人り初  
 使の個あつて手綱をひく車と推人夫の水勢を辟易。互小面を見合して如何  
 とと聞たる。僧正御覽と此も怖る色なく入夫の向ひ你亦患も更か我路  
 を開た得ざる。只水中車より三使の車の後續たるとして車の内にて兄  
 詔成唱へ印と結りも奇あつても漲り溢り川水急しう西段の合と中小一條の  
 陸路開けり。衆人は是をみて嘖と感賞。実奇特の法力。帝の御信仰在  
 すの理りかると。勇気生車我押さるるを勅使感嘆し續て駒を進り上下も  
 安く川流越果れ。後八回の大川とかり白浪高くとまふ。斯て僧正御参内ありて  
 玉座近く膝行し先玉體の御安泰と祝し。頓て水晶の珠數をとり大威徳の  
 法を修り。不思議や今迄鳴閃き雷電忽と遠去り。遙か紫宸殿の上小鳴  
 真たると是亦依て至上少一層慮を安んぬ。一時平公下の溜息吐て猶生る心地

せれり去程小尊意僧正猶も雷災を鎮んと紫宸殿へつて祈り又を雷す清涼  
 殿の上小鳴清涼殿お移りて修法あれ。梅壺梨壺お鳴真た七十二殿十二坊を追  
 回りく根限お祈り。至上菅公と左辻のり更と深く御後悔在。萱  
 丞相及び子息達の左辻一件の書物取出させて悉く焼捨せり。猶罪思免み  
 勅宣を下され且左大臣お増官なり。るる倫吉と賜り。これを雷神も是亦依て怒  
 を和げ。うん漸く風雨収り雷鳴も止る。君を首より公卿大夫下官まで漸  
 心だ安んぬ。互亦恙あれを相賀し。尊意僧正猶も災変と襪んと内裡お祈り  
 て祈の檀を致け。七日の間秘法の加持をぞ修せ。

時平患奇病死去 光定國菅根妻死洛中洪水條

本院の大臣時平を先と光定國菅根の輩已小天雷の為小腹平殺さる。小主  
 上小思尺もより小依て不思議の命と助り。且法性坊の行力左辻思免の勅詔ホて

天変鎮りくを列位安堵の思ひをかり今更菅原を宥人とも帝の奏して菅原四  
 入の子息達の流罪を思免在て都へ徴還し又と勸もつれを即ち左辻の國へ罪  
 思免の宣旨とぞ下されど御お土佐國へ左辻せられり長男右大臣高恒佐渡國へ流  
 されりひつ式部大丞景行續岐國へ流されりひつ三男藏人景茂以上三人皆其國の  
 配所にて御述去ありりも又本官お還し猶官一階を加へり只伊豫國へ流されりひつ四  
 男秀才敦茂の存生おて既洛あり菅原の名跡を嗣ひり斯て其年暮明  
 延喜九年三月本院の左大臣不斗奇病お深次第疾疾となり昼夜悩む苦  
 悶られんを御其所を首とす御内人親族方お大不孩れ良醫お委て醫療手と  
 尽し緒社の神官緒山の僧お命とぞ加持祈禱遺る所かく修せられれ露斗  
 も強なり漸く小形容瘦衰果彘狂く多須波お菅原相おまりて予と將行人と  
 するぞ噫今雷神お予と曳裂人とするはかんと雷言王殿中と東西南北と四面り狂ひ

聞られり是ま其の菅公の西垂の崇とたりまおあす自身我と求り奇病たるを  
 其故を去年大内雷災の砌心小菅公の崇なりと思ひり恐怖の念骨髄お微  
 り其後ハ昼夜菅原を怕る念止時かく遂お奇病と成るなり彼血中お蛇有と  
 思ひり心小病を生り角ラの時繪の影なりとて宿病忽ち愈ると同し理也  
 御も自身お想より生り病なりと覺ず増て余人を猶お菅原の崇なりと思ひ  
 結此上當時無双の驗者とぞえり浄藏貴所を請て加持せむる心霊の退  
 散する事も有りとて浄藏貴所を招た精左府の奇病平愈の加持を修  
 せられり此浄藏貴所とて三善清行の息男おて幼稚の時より佛法お心を傾け  
 出家して普く経論を學び究め行徳衆小勝と二年都八坂の大塔を造り浄  
 藏毘沙門天の法を修とて是を祈られり一夜内お塔の正整り多あり其年  
 て其法を感心賞り多りる名僧の丹絨を抽て加持せられり大臣の狂病



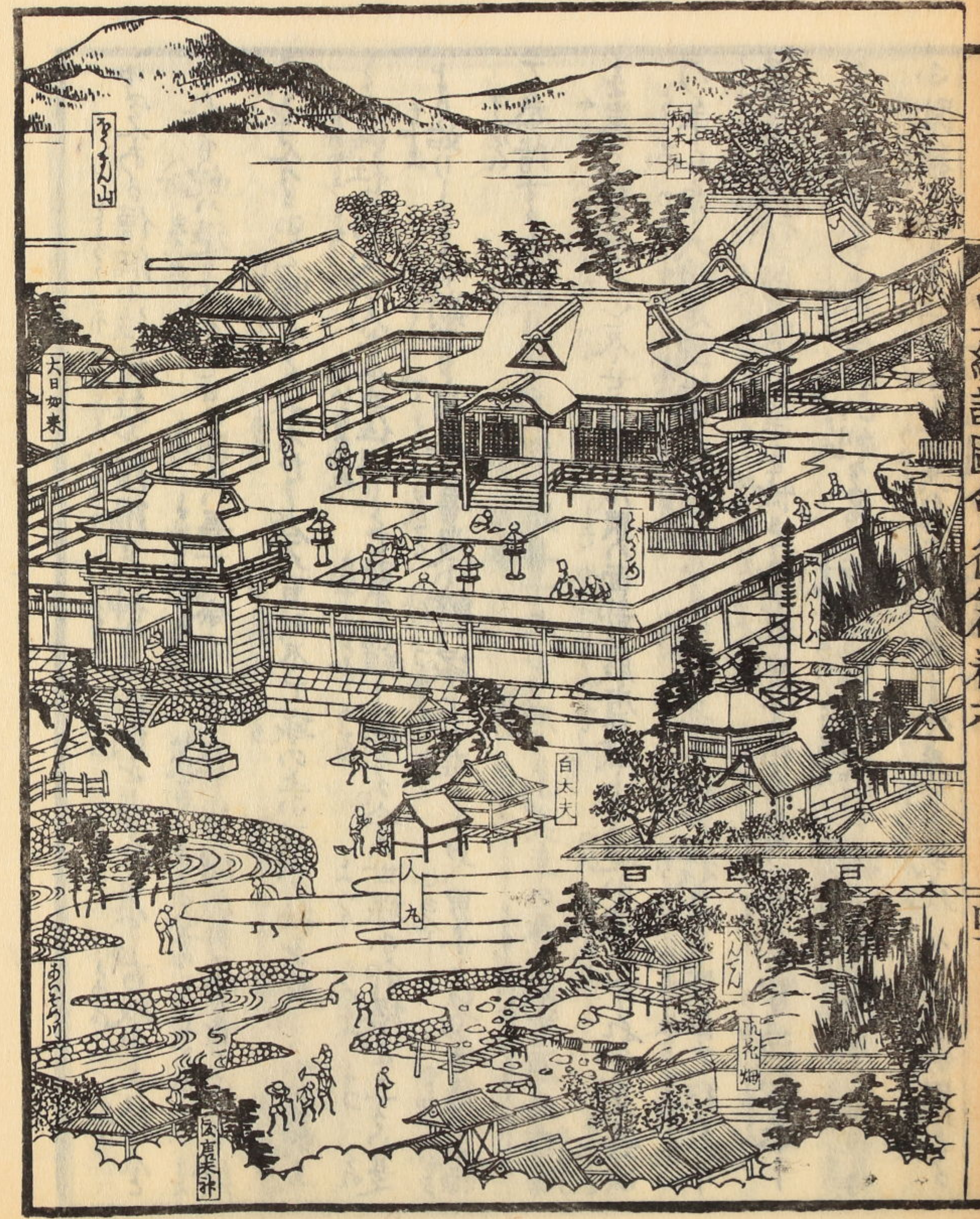
次弟小鎮り狂ひ面らう更止れを館の上下稍心を安ん浄藏の行力と最頼も  
 一を思ふもされも天責る所の患病あれ左府の身體瘦衰飲食俱小瘵  
 病床小卧瘵の喚く如く喘れる浄藏は昼夜加持の檀小在て法華経を續  
 誦せしるる小余り舌の乾たれ湯を飲んと皆く経を續止まら時小大臣の左の耳  
 乃孔より青色の小蛇三寸許首を出し舌を内りて座中に見回る是を見て侍療  
 侍る女房近習們大糸後れ皆身の毛と聖二回ともる者や。兔首成て戦慄  
 々浄藏も發狂さう。道德勝より勇猛の僧あれ此も怖と又法華経を  
 續誦せしるる蛇は耳孔退入る是より浄藏一口ふても續誦を止られば件乃  
 昔蛇耳孔より首を出し座中に見回す更公前のて。経を續む退入誦止む出る  
 不ぞさりの浄藏も慄果根氣を疲とてあする小遂ふ時平大臣蛇の出初  
 一日より弟三日小大糸煩悶し虚空を擲て狂死せしる。天野の程ぞ恐るる

時小年齢三十九才とほえし。御堂側室の悲歎はる更なる子息八条大將保忠  
 口中納言敦忠其余の一族縁者の人悔々歎けも帰るれ道不あはる後屍を  
 棺小収め送葬の管々執行ひ一堆の塚の王とをかり小斯て初七日小成れを御  
 臺所を先く子息保忠敦忠其余の女房達雜掌門の人小いる追唐参せし  
 れるる墓の上小五尺余の青蛇蟠り居て人の面をふらふは咬み体たれ  
 ら女流の輩ハおふやとまぎうて袖を覆て逃出るあり伏膊もある保忠敦忠以  
 下小大糸後れ惘惑なり。只時平の舎弟大納言忠平の勇氣ある人小て此中  
 動せむ武小指揮と蛇を取捨させしれ多小蛇已と這去て更小行方をま  
 すかりり。是小依て各唐拜終り歸らるる。二十日小及びて又皆ち揃唐参  
 せしるる小此度も墓上小蛇の在更前のて。まら先日より稍長大ふらうて蟠り  
 居るる小女姓の面ハ公前小倍と發れ怖且此後八唐参する女姓ハありり

男子の流石女々々ベリベリ 庶忝しんせざる由人聞きこて恐怖おそ懐なみ七日なな小こ屠と祭まつりする小こ塚つか上のうへ蛇へび在あり取捨とれば己おのれと去いるま祭まつりする度たび小こ蛇へびあらずしとし更またおとむ。大おほ小こ困こり果はつ後のち小こ墓かぶ所の四方よ高たか堀ほりを造つくり。嚴げんく門かどを構かまて小こ虫むしも這よりこまちつつ小こ監かん率そつと附つて守まもりて祭まつりせしるま天あま降ふり地ちより生なるう蛇へび尚なほ上のうへ在あるまど不ふ思し議ぎたりる人ひととてあま奈な何なにせんと高たか議ぎするま一人ひとりの曰い名な香かを不ふ断た炷たきとれ蛇へび来きるま是これ緒いと虫むしハ香か氣きを嫌きらむまと実まこともとて巨おほ大おほ香か小こ火ひを不ふ断たと伽が羅ら沈しん香か白はく檀たんの類るいを堆たい高たか盛さか上のうへ炷たきりる其その香か氣き遠とほ近ぢか小こ薰くんど得えぬま言いわぬま小こ聲こゑも件くだんの蛇へび猶なほ上のうへ在あるま是これ由よし使つか吏し成なり達たつ人ひと小こ命いのちとてま庶しん所しよ不ふ於おて暮くれ目めの法はふを行おむる其その法はふ音ね小こ應おとどと大おほ勢せ風かぜをか如ごとかるま声こゑをか遠とほ近ぢか小こ震ふるひま蛇へび小こ曾そうて出い止とまる是これ由よし其その法はふとて相あ止と道みち徳とく乃すなはち

中なえある僧そう細こ小こ法はふ華わ経きやうを續つ編ひをか神かみ官くわん小こ祝しゆ詞じをか上のうへせしるま百ひゃく般ぱん小こと除じよんとすれも蛇へび退たいずと。尽つ七日ななの頃ころ小こ長ちやう丈ぢやう太たい丈ぢやう大おほ竹たけ小こ増ま紅こう井いの舌した長ちやう肉にくとし緒いと人ひとをか小こ蛇へび退たいずと。今いま百ひゃく針はり及およびて塚つかのう小こ箇このう社しゃをか建たてしては彼か蛇へび来きるま此この社しゃの内うち入いるま靈れい位ゐ汚けとし擊つりて鎖さ一いつ固こるま。今いまのう世よ塚つか小こ卵らん塔たふをか立たてしるま是これより始はりしとし斯ごとくも庶しん所しよのう每ごと度たび小こ蛇へび塚つか上のうへ在あるま。男子おとことしりの後のちとし怖おそるま。恐おそるま。無なりしるま。去いるま。延の喜ぎ十じゆ年ねんのう成なりるま。其その年ねんのう春はる大おほ納な言ごん源げん光くわう悪あく瘡そうをか患わづるま。醫い治ち千せんとし不ふ治ち果はつと面めん部ぶ股こ腐ふ爛らんとし遂つい小こ逝し去させしるま。又また其その次つぎ乃すなはち和わ泉せん大おほ將しやう定ぢやう國こく俄が小こ發はつ狂きやうとしりの自みづか己ぢ太たい刀たうをか拔ひきて我われ身みをか突つ串くわては狂きやう死しすま。藤ふじ原はら菅か根ねハハ管くわん靈れいのう崇たかまりとし身みのう無な更さらをか祈いのんと馬うま小こ駕がては賀が茂しやう社しゃ忝しんるま。小こ踏ふ殺ころされしるま。箇こ様やう小こ管くわんハハ管くわんをか發はつ言ごんせしるま。今いま悉しつくも變へん化かするま。天あまのう罰ばつとしり

筑紫府太宰府天満宮



白太夫

白太夫

とろろと不知世人皆菅公の崇かりと思ひ吉とつくと始合々如之あす時平乃  
 子息保忠敦忠兩人奇病を患て死し尚々時平の妹も女御隠子も患病  
 小依て死すもひも續て春宮保明親王の時平の甥も病死なりもひも多し帝の御致死  
 大方も是も菅霊の所為なりと思召返さるも菅公を左遷しめし一更と脚  
 後悔在し筑紫(勅使を下され菅公の霊を宥られん)正二位の官を贈りし神小  
 鎮祭り大富天神と神号と賜りし也也も天帝の怒尚止り久延喜十四年  
 甲戌三月下旬浴中小火災發り上二条より下五条まで東八川原より西六宮通まで  
 一四の焼亡し僅小内裏の焼残れども内裏より上の人家も残少類焼し三日三夜の  
 間火鎮らずさし由小廣を平安城中忽ち赤土となり公御殿上人も住家けりすも  
 武士市人山林(逃入あり)近國(遊行)も多し親を失ひ子ととどけ夫を失ひ  
 妻小別と尋ひ迷ひ呼さるよ光景何鼻焦熱の地獄也斯中を怪まれる是也

さく希代の大変りおと怖る所小年六月初旬より大雨降續た白昼も黄  
 昏の如く市街いよも春の火災小家造も間租の仮住居あれを雨の不洩家の  
 なく大困り果多小積中句後小雨止天霽も少し心を安する間もあ  
 忽ち賀茂桂木の大河より洪水溢て浴中水の深たつ八尺余小及び水勢家  
 を漂り木竹木と押流し水の来る度の一絆なく疾くを牛馬雞犬を  
 引も更かり老人女小兒の引水漂ひ流し溺死する者何百千の數をまらず  
 野武士強次無混雜騒動の紛兼に金銀財宝衣服本を奪ひ掠て逃まり  
 官よりなる狼藉も防たる暇もなく其錯乱筆紙小冬難し過水小流れ  
 ざる家も床より上四五尺水築れを屏風襖も沾爛と障子も壁も骨  
 たりと成家内の男女八屋根の上へ逃上り突天小照蓋れて大苦も暑小中  
 て疾を尋するも少くす春の火災といひ又此水難小遭吏前代未聞と変るか

その如何成行世の中と云々。爾時小古の空海和尚の如き名僧ありて、火災洪水を以て鎮めむと欲せしが、今の世の僧、官位衣服を尊げ小見せんと、凶変を祈防ぐ程の名僧もなりと云は合々小遂小其風統大内(空海)著述せし書籍何ふも、官庫(納む)と勅詔下りたり。臣下奉り東寺の僧侶小直上旨の趣を傳へられたる山奉て喜悦の眉を用た真言宗の美目是小過むとて倉庫に搜り、空海師十八の時述作有し三教指歸を先くとて代り著書貝玉造と題せし假名草紙も輯て是を献りたる。依其書以て朝廷の官庫(納む)めむひたり。吾朝小名僧妻中も如此上天子より下万民小の逆末世の今も猶尊信する空海和尚の法徳こそ又類ひたり。菅公贈官賜神号 延喜帝御讓位四海太平條 延喜帝菅空の宗と鎮むん為小空海和尚の策文を不遺大内の文庫小

納りめむひたり猶世上穩うあさりたり。延喜二十二年小空海和尚弘法大師と謚を賜り年号も延長元年と改元めひたり。我中元年三月洛中大地震一就中五条より下、南北三十余町東西二十余町が間人家を揺崩し、神社佛閣を傾覆せしむる。按る小是先年の天災の時焼残し所かろ不思議なり。其物言の凄小紀支世果も滅却するると疑れ老人小兒婦女の逃後一輩ハ厭小殺手を棟柱の倒るる小中で死亡する者凡三千余人小及び小の痲を蒙る者ハ幾万人と云。是の菅丞相の怨靈の祟かると言觸りたり。主上も勅使を筑紫太宰府へ下し、菅朝を新小修理せしむ。八月四日初め祭禮を執行めひて、此後例年懈怠なく祭禮を執行せしむ。勅詔ありたる中、此年と始くと例年怠り手執行れり。時小勅使神殿小昇て拜礼し敬んで宣命を續上りたり。其夜の中社前小一面の瑞石現れ、面玉盤の如く石面小七言絶句の詩文字鮮小んえり。社司大

少建勅使斯と言上々れ勅使の奇異の思ひを社奉と是と續かん

昨為北関被悲士上 今作西都雪耻尸上

生恨死歎其奈我 今須望足護皇基

とあり勅使此奇瑞を見て感涙を流し皆ハ菅靈怒を鎮めりと深く神徳を仰

れ敬して都へ還上りれ

因小曰其後一条院の御宇正曆年中菅原為理を勅使して菅公正二位

太政大臣の宣を贈りて天満大自在天神と神号賜り二十二社の敷ふを以て是

より緒園とも漸く小社を建木像を彫り或畫をかくて敬ひ奉る所敷き

む都北野の天満宮ハ其始天慶五年七月十二日西の京七条小住綾子と云

女小菅神御託宣すり昔世存在れ北野右近の馬場小遊丸

浴の中小閑子勝る地彼所不知なり勅使を受西府の雲と消るるといふ

一念の靈六折筑紫より彼所へ行通ひて心を慰りて你右近の馬場小社を管

て立寄便を得せりものと告めいへ綾子難有妻お思ふも其身賤く貧

乏む右近の馬場小社を建る更能く只此木の菴のわらふ小中なる祠と管

瑞籬を結び五年が向崇祭りたり其間小菜種と供物小献り更有それへ

今以て例年二月二十五日小菜種の御供の神妻あり其後天慶九年江洲平野

社乃神職の男太郎丸とる者小菅神御託宣すり都北野右近の馬場の辺小

一夜小千本の松生ず是予が住する地なり你都西の京から綾子と呼ぶ女

小力と添彼所小社を建よと告のひきま太郎丸が又不思議小思ひ都へ上りて右

近の馬場より入る小入群集此地前宵一夜の中小松千本生出す世の中不

思議ある更なること小噂する小太郎丸が又託宣の昔者明を感下西の京

ある綾子が住家へ尋行對面して小神託の趣を語合ると小相議て大内菅

神の御託宣の始終を奏聞し、帝睿感す。右近の馬場御社を御造  
 官在て綾子家の小社を迂り、今北野の天満宮是なり。彼一夜の中  
 千本の松生ず、地を今小千本と習り。又浪速天満の天神の御社も村上天皇の  
 天曆年中菅神の御神託依て社を御造官あり。河洲道明寺の天満宮も曰  
 ト頃御社を建られ、其他諸國津浦も此神を崇祭する所なり。神威  
 の灼然たる吏緘、日新日新、天子より下億兆の庶民、尊信し  
 ても、祈願して成就せしむ。御尊む。御尊む。御尊む。  
 去程小勅使、太宰府とて、帰洛。春内々太宰府の神前小般若石の詩出  
 現せし、奇瑞を奏聞せられ、帝睿感斜あり、思召し、信菅神と御信仰  
 在る。斯て後、天神地祇も怒茂和け、いん世上穩小かり。上下心と安  
 んど、皇小延長三年六月、主上御施瀆を患せ、いん諸王公卿、大不

疾、是中又菅霊の祟あり、やとて和氣丹波の典藥小委ね、諸社小  
 御平愈の加持祈禱を修せし。尚、陰陽頭小上平、いん小占文吉、い  
 ん程、御快復あさせ、いん列位を得、いん果とて  
 醫藥効を奏し。主上御本復在る。是、いん仍て、諸王公卿、いん更なり、洛中  
 洛外の人民も、皆万歳と唱る。其翌年、延長四年、大和國多武峯の社を  
 御造官在る。是、大織冠鎌足公の廟所なり。鎌足公在世の砌、深く佛法  
 皈依在て、當所小基の多寶塔を建立し。念持乃舍利を安置し、十二万僧坊  
 を建られ、いん塔の峯と呼、いん後多武峯と文字を書更し。鎌足公又  
 曾て我像を描せ、將來朝家及我子孫の中、小変更あ、いん豫告知、いん誓  
 ひ、額の血をとりて、繪具小措交、肉眼の儀式、嚴小宮て、一社小納られ。いんその靈  
 威あ、いん未代、いん追國家小、事有、いん時、いん件、いん画像、いん已と、破列、衣

一山鳴動して其凶變と告知。喪事治る時ハ画像の破裂自茲愈合て旧の如  
 しくる奇特の靈像あれを朝廷亦御崇敬在て今度社及諸堂を修理  
 金銀珠玉を鑄られ其莊嚴眼を驚かぬ者公無りたり。同五年大納言忠平延  
 喜六十二卷と献られ是ハ左大臣時平菅公之撰。後我ハ菅家小右女  
 友有と世上知れん為紀長谷雄を相談對人として延喜式を撰まらる。半途  
 て時平薨去せられ長谷雄も死没する。時平の舍弟忠平凡の志ハ継ぐ残  
 るハ撰と全部と献せられ也。同六年小風土記六十卷を撰せり。同六年小  
 野道風小勅と先年巨勢金岡書賢聖の障子ハ其銘と書せり。同  
 日八年九月主上御不例小依て帝位を春宮實明親王中禪のハ此君と朱雀院  
 とやも御幼推せり賢君とて然も藤原忠平左大臣神佐せられ。同海平  
 皇統記圖會後編卷之六 大尾 小て皇統愈万代不易と祈奉りけり



いんげん  
 せん  
 せん  
 せん

享和三癸亥新刻  
 文化十四丁丑再刻  
 嘉永五壬子三刻

愛知縣名古屋大曾根  
 矢野平兵衛



